

古代母権制社会研究の今日的視点

—神話と語源からの思索・素描—

松田義幸・江藤裕之*

生活文化学科生活文化史研究室・*長野県看護大学外国語講座

Modern Perspective of the Ancient Matriarchic Society

—From a Viewpoint of Mythology and Etymology—

Yoshiyuki MATSUDA and Hiroyuki ETOH*

Department of Human Sciences and Arts

*Nagano College of Nursing

In the rapidly globalizing world, we are facing a heap of complicated and challenging social problems in various areas regarding family, community, environment, education, health-care, work conditions, industrial economy, politics, defense, international relations, etc. In order to examine the nature of such problems that may have originated in the traditional patriarchic social structure, the present authors pay special attention to the ancient matriarchic society preceding the patriarchy. By means of scrutinizing the matriarchic society before the patriarchic domination, focusing on the people's view of nature, world, and life expressed in their myths and languages, we will be able to have some clues to tackle and solve our problems in the modern world. From this perspective, the present authors speculate what we can and should learn from the ancient archaic society in an interpretative approach of the myths and an etymological analysis of ancient words referring to the indispensable related literature, particularly J. J. Bachofen's *Mutterrecht* (1861), R. Graves's *The Greek Myth* (1955), B. G. Walker's *The Women's Encyclopedia of Myths and Secrets* (1983), E. Fromm's *Love, Sexuality and Matriarchy* (1994), and Yasutoshi Ueyama's *Myths and Science* (2001).

Key words : Mutterrecht, Johann Jakob Bachofen, Robert Graves, Barbara G. Walker, Erich Fromm, 上山安敏 (Yasutoshi Ueyama)

はじめに

本学生活文化学科では、平成19年度から新たに「女性社会論」、「女性社会論演習」の科目開設を予定している。その開設に向けてのプレ授業を、2年前から「生活文化史演習」と「卒業論文演習」の中で行ってきた。この講義内容に関連し、同じ問題意識を持つ長野県看護大学の言語学・比較母語学の江藤研究室に協力を求め、インド・ヨーロッパ言語文化圏の祖語・祖宗教の側面から共同研究を進めてきた。平成18年10月2日に、同大学にて教員を対象とした中間研究発表会が開催され、学際的な立場から助言を受けることができた。本稿はその時の内容をもとに加筆修正を

行ったものであるが、論文としてはまだ中間段階である。インターネット上でも公開し、多くの助言、批判を受けながら、完成論文に仕上げていきたい。ここで、本論をまとめるにあたり、いかなる条件と方法の下に、執筆をしたかを箇条書きにしておきたい。

- (1) 本論文のオリジナリティーは、映画の原作と脚本の関係にたとえれば、バハオーフェン、グレーヴス、ウォーカーの文献を原作にし、「古代母権制社会研究の今日的視点」を見出す脚本（仮説）を示したことにある。
- (2) バハオーフェンの『母権制』（1861）の現時点から見た短所は、ギリシア神話の女神、男神の出自

と性格が整理されていないことである。そのためにプレヘレネスの月女神一族の神々とヘレネスのゼウスを主神とするオリンポスの神々との違いが分かりにくい。

- (3) グレーヴスの『ギリシア神話』(1955)の長所は、プレヘレネスとヘレネスに分けて神々の出自と性格を標準的に記述してくれたことである。
- (4) さらに、ウォーカーは膨大な文献を用いて、『神話・伝承事典——失われた女神達の復権』(1983)を発表した。これは、「父権制社会」の男神中心の神話・伝承・宗教を、その前の「母権制社会」の女神中心の神話・伝承・宗教に対比させ、現代社会が「母権制社会」から学ぶべき Great Ideas を抽出し、A B C 順に並べ、各 Idea に関係する基本文献をリストし、その上で解説をしたものである。比較神話、比較語源に関し、これに並ぶものがない優れた事典である。私たちの論文の語源の記述はウォーカーのこの事典を基本にしている。なお、神々は原則として英文表記にした。
- (5) 大学の研究紀要の性格から分量に制限があり、図表を最小限にせざるをえなかったが、Aphrodite, Hermes, Zeus, Hera 等の図像及び註釈はインターネット上で参照することができる。参考文献参照。

序論「古代母権制社会」研究の動機と方法

1. 冷戦終結後の「西欧 vs. 非西欧」の対立

冷戦終結後、世界は新秩序に向かっているのか、それとも無秩序に向かっているのか。世界各地で起きている対立、紛争、テロリズムの現象の真の原因は何であるのか。21世紀を前にし、世界は未来に不安を感じていた。その世界に対し、ハーバード大学のサミュエル・P・ハンチントン教授 (Samuel P. Huntington, b.1927) が、1993年夏号のフォーリン・アフェアーズ (*Foreign Affairs*) 誌に「西欧 vs. 非西欧」の「文明の衝突 (The Clash of civilizations)」と題する論文を発表した。3年後に、同誌1996年11・12月号に「西欧はユニークでユニバーサルではない (The West Unique, Not Universal)」と題する論文を発表、さらに同年『文明の衝突と世界秩序の再構築 (*The Clash of Civilizations and the Remaking of World*

Order)』の著書を出版した。これら論文、著書が世界に投げかけた波紋は実に大きかったのである。まずは要旨を述べておきたい。

第一論文「文明の衝突」

冷戦終結後の新時代における対立、紛争は、イデオロギーや経済の違いに起因するのではなく、民族、宗教、言語、歴史、伝統などの文化的要素を共有する国家群からなる文明圏の違いに起因したものである。世界は西洋文明、儒教文明、日本文明、イスラム文明、ヒンズー文明、スラブ文明、ラテン・アメリカ文明、アフリカ文明の八大文明圏に分れる。そして、世界は地理的な空間を克服し、ますます小さくなり、異文明圏の人々との交流が増え、このことが自分の属する文明へのアイデンティティを自覚させる。その結果、異なる文明圏に対し敵意を増幅させることになる。未来の世界政治シナリオでは、普遍的な世界文明は期待できずに、逆にイスラム文明と儒教文明が結びつき、「西欧 vs. 非西欧」の対立の構図となろう。

第二論文「西欧はユニークでユニバーサルではない」

非西欧諸国は日本の「和魂洋才」をモデルに、一層の近代化と一層の文化の非西欧化（伝統文化の重視）を図ることになる。この文化の非西欧化に対応するには、アメリカとヨーロッパが共通の宗教（キリスト教）、共通の伝統、共通の文化を強化し、ユーロ・アメリカンを構想すべきである。アメリカとヨーロッパは、古典的遺産、キリスト教、ラテン語、政教分離、法の支配、市民社会、民主政治、個人主義といったユニークな信念・習慣・制度を共有している。しかし、これらは西欧文明の文化的アイデンティティではあっても、非西欧文明圏にとってはユニバーサルではない。したがって、ヨーロッパと北アメリカからなる西欧文明圏が非西欧文明圏に対し優位に立つために、トルコとギリシアを排除した NATO の強化を図るべきである。

著書『文明の衝突と世界秩序の再構築』

この著書の大意は、第一論文の「文明の衝突」と同じである。論文テーマを詳述し、洗練・補足し、多くのアイディアを発展させている。新しい視点は二つあ

り、一つはイスラム文明圏の人口増に起因する問題であり、もう一つは中国問題である。イスラム文明圏は人口増加により、中でも 15 歳から 24 歳の人口増により、原理主義、テロ活動、反乱、移民の活動等に活動家を提供し続けるだろう。中国問題は南シナ海の石油資源の領有をめぐりヴェトナムと対立することで、「ヴェトナム vs. 中国」の構図が、「ヴェトナム・アメリカ vs. 中国」となるシナリオである。

以上、ハンチントン教授の提起した「文明の衝突」シナリオは、1940 年以降に「フォーリン・アフェアーズ」誌に掲載されたどの論文よりも大きな論争を巻き起こすことになった。論争、波紋は、ハンチントン教授の悲観的未来シナリオに対する反論、批判がほとんどであった。日本でも、山崎正和、今道友信、中根千枝、五百旗頭真といった識者から反論、批判が相次いで出された。さらに、日本経済調査協議会が 1996 年に「文明の対立と融合」研究会を組織し、4 年をかけてその成果を『現代文明の研究』（朝日ソノラマ、1999）としてまとめ、対立を超える努力未来シナリオを提起したのである。

研究会は、民族学・人類学の中根千枝教授の「文明の衝突」批判の視点を基調認識としながら、ハンチントン論文に少し距離をおき、学術的な立場から「異文化・異文明の理解」、「日本の対応」を検討する方向で運営された。この研究会で基調認識とした中根千枝教授の「文明の衝突」批判とはどのような内容であったのか。

ハンチントン教授の「西欧 vs. 非西欧」の対立の構図は、十字軍以来の「キリスト教世界 vs. イスラム教世界」の対立の構図を安易に全世界を視野に入れ拡大したものである。アジアにおいては、対立図式ではなく、共存・交流・合流・融合の傾向が強い。例えば、宗教においても仏教、ヒンズー教、儒教、道教、そして、キリスト教、イスラム教まで互いに対立せず、共存・融合している。一般的に見ても、文化・文明の違いは、本質的な対立の原因とならない。それは第一に政治権力が領土の拡張やその他危機に直面したときに民族の文化・文明を旗印に利用するからである。第二に人口増大を固有の地域で支えきれなくなったときに侵略をめぐって対立・紛争が起きる。第三に今日の国民国家の国境線が自然な民族の人口分布を無視したこ

とに起因して対立・紛争が起きる。人間の長い歴史のプロセスの中では、各民族は、国民国家の以前から共存・交流・合流・融合していたのであり、本来よきものを「さらってくる (kidnapp)」であった。研究会は、この基調認識のもとで、kidnapper モデルとしての、日本の文化・文明の展開ノウハウの「受容→交流→協同→創成」をいかに世界に PR するかについて検討を重ねたのである。

2. 「地球市民・地球社会」の自覚を促す理念

ハンチントン論文の大きな副次効果としては、地域研究 (area studies) に対する日本人の関心が深まったことである。地域研究のサイズは西洋文明、イスラム文明等の大文明圏であったり、アメリカ研究、イラク研究という国家単位であったり、国家の中の地方単位であったりする。しかし、どの対象サイズにおいても、研究方法は専門化した単一科学 (disciplinary science) ではなく、多くの学問分野を複合化・総合化した学際科学 (interdisciplinary science) である。この地域研究は、人間の生き方、社会のあり方を総合的に認識する方法として開発されたもので、大学における主要なカリキュラムは、比較文化・文明論、国際関係論、政策科学、国際コミュニケーション論、行動科学等である。もちろん、地域研究の方法は確立したものではなく、見直しを繰り返しながら、研究対象ごとに違いが出てくる。ハンチントン論文は、地域研究として粗さと欠点が目立つと批判されたが、学際科学、政策科学の 1 つのスタイルとしては高い評価を与えられている。特に地域研究において、民族・宗教・言語・文芸・芸術・生活文化の文化的要素と比較文化の研究の重要性を指摘した意義は大きい。

ハンチントン教授が大文明圏、国家、地方の単位の社会運営システムの中心に固有の精神文化の根源的宇宙観の象徴体系、意味体系、言語体系を位置づけてくれたからである。日本においては、第二次大戦時におけるルース・ベネディクトの『菊と刀』が、あらためて地域研究のモデルであることを思い起こさせてくれたのである。日本は世界の中で、極東に位置し、島国であったために、日本で外国の異文化・異文明に出会う人たちは指導者に限られていた。しかし、今日、すべてがグローバル、ボーダレスに進む中であって、その日本人も市民レベルの次元で、直接、間接に異文

化・異文明に直面するようになってきた。その結果、これまでの国家観は極東の属地的国家観でよかったが、現在においては、外国に出かける日本人一人ひとりの頭の中に存在する属人的国家観が問題になってきた。そこで、日本人一人ひとりにとって、「自分とは何か」、「自分のアイデンティティとは何か」の問いかけが大切になってきたのだ。

もちろん、この問いかけは日本人だけの問題ではない。すべてがグローバル、ボーダレスに進み、世界が小さくなり、どの国の人々にとっても、重要な問いかけになっている。現に世界が直面する問題を国際機関だけに任せるのではなく、市民レベルでも、「地球市民・地球社会」の自覚のもとに取り組む輪が広がっている。そして、その時に「地球市民・地球社会」が拠り所とする根源的宇宙観の模索も始まっている。メディアもこの問題に関心を寄せ、テレビ番組や雑誌の特集などの冒頭に、ポール・ゴーギャンの長い画題と絵をよく用いている。

われわれはどこからきたのか

われわれはなにものなのか

われわれはどこに行くのか

現代に生きる 60 億の人々に共通する「地球市民・地球社会」の自覚を促す根源的宇宙観をいかにすれば見出すことができるのか。

3. 古代母権制社会への接近方法

2001年に国立科学博物館が「日本人はるかなる旅」展を開催したことがある。そこで、現世人類のホモサピエンスの誕生と移動・拡散の経路を現代科学によって明らかにしていたり。ホモサピエンスは今から約 20 万年前にアフリカにおいて誕生し、そこに 10 万年間住みつき、10 万年前から移動が始まった。6 万年前には現在の黒海、カスピ海周辺地域に移り住み、さらに 5 万年前にはインドからスダランド、4 万年前にヨーロッパへ、そして日本列島に、シベリアには 3 万年前に、そして、そのルートで北アメリカに 1 万 5000 年前に移動・拡散した。それでは、この経路拡大図に関連づけて、ゴーギャンの問いかけについて思索してみると、「地球市民・地球社会」の自覚を促すいかなる根源的宇宙観を見出すことができるのか。

一般に高校の世界史の教科書では、20 万年前、10 万年前、いや 4 千年前のホモサピエンスの石器時代、

青銅器時代、鉄器時代までの記述は、文字がほとんど無かった先史時代で、記述はいたって簡単である。発掘によって明らかにされた事実しか扱っていない。ところが、現代の生命科学、生命誌は、生物の進化について、5 億年前まで遡る革新的な成果をあげている。この成果に人文的方法を絡ませ、現世人類のホモサピエンスの価値観、ライフスタイル、社会の起源を探る手立てはないものなのか。これまでの研究成果を組み合わせる中から、その手がかり、糸口を見出せないものなのか。

先史時代と歴史時代の一番大きな差は、文字資料を使うことができるかどうかにある。文字資料を用いれば、古い時代の人間、社会、文化、文明等について実証的に知ることができるからである。それでは、ホモサピエンスの文字はいつ頃できたものなのか²⁾。最古はメソポタミア文字で紀元前 3100 年頃、次にエジプト文字の紀元前 3000 年頃である。世界史の記述は、この頃から詳しくなる。それぞれの民族が文字を作り出すようになってからの世界史はさらに詳しくなる。たしかに、文字資料による世界史研究の方法は実証的であり、説得性がある。しかし、世界史研究が文字資料中心になったために、見落とししてきたこともある。「書き言葉」はそれまでの「話し言葉」を移し変えたものであり、「書き言葉」の単語の意味は、文字のできる前の「話し言葉」の単語の意味と同じであったはずである。もちろん、後に変化することはある。しかし、それでも言葉の古層を探れば、つまり語源を調べれば、話し言葉の時代の単語の意味を探ることができる。古語の単語の意味を手がかりにして、先史時代のホモサピエンスの生き方と社会を支えていた根源的宇宙観を探ることができるはずである。文字ができる前から受け継がれていた政治や宗教の「まつりごと（政事・祭事）」に関連する神話、言葉・単語の意味、そして、生活道具や祭祀道具・遺跡に画かれた図像等を参考にして、根源的宇宙観を探り出すことができるはずである。

実は、このような研究はすでに始まっているのだが、日本では研究者の間でも良く知られていない。現在、直面している民族間の対立・紛争・テロリズムは、原理主義という根源的宇宙観に支えられている。しかし、現代のイスラム社会、西欧社会、イスラエル社会の根源的宇宙観はいずれも男神を支えにした父系・家

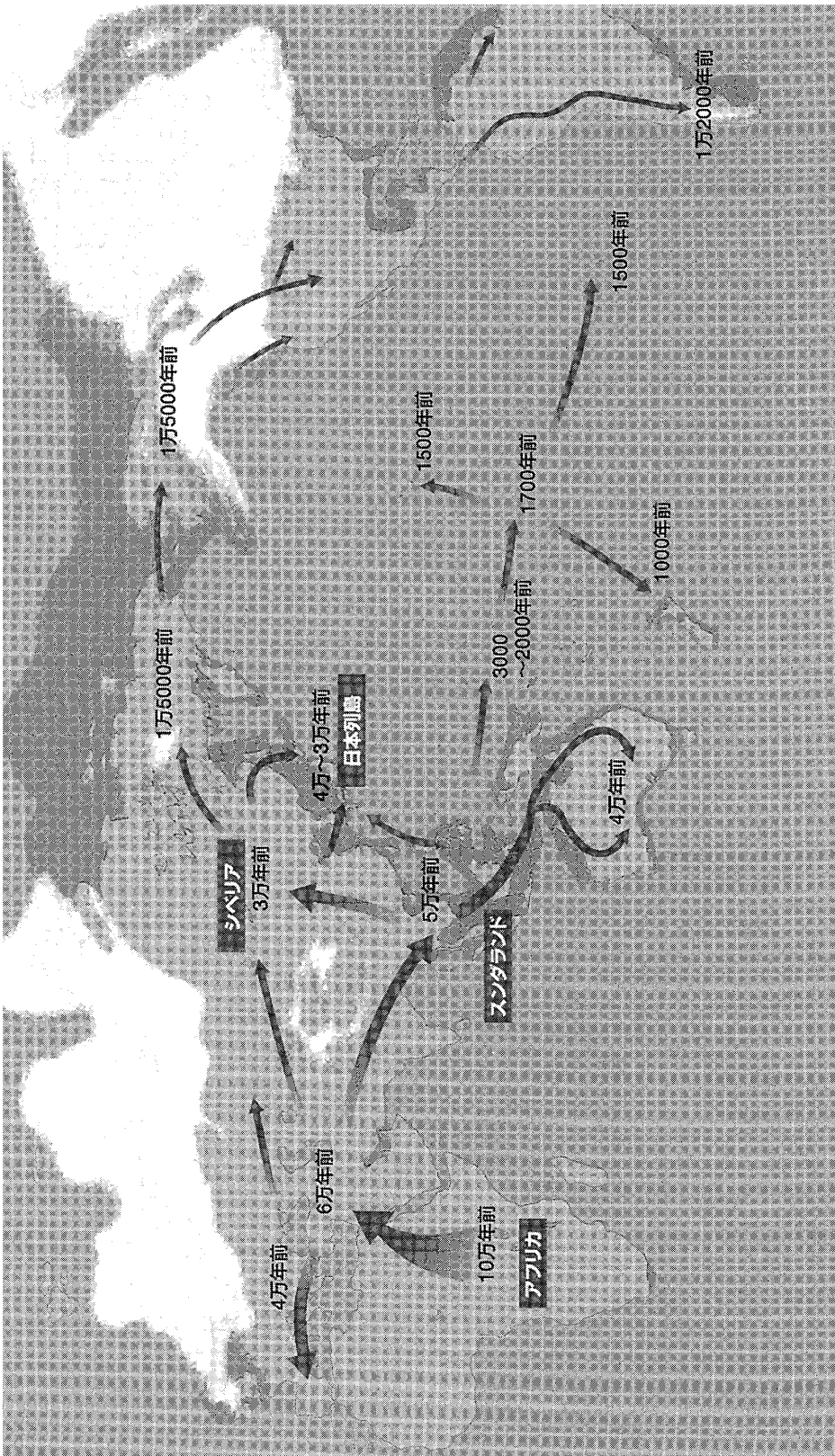


図 1 推定されるホモサピエンスの拡散経路
出典：海部陽介著『ホモサピエンスの誕生と拡散』カタログ冊子 p 16/国立科学博物館・NHK 主催『日本人はるかなる旅路』展 2001



图2 「世界の古文字起源地図」

出典：Hsu Ya-kwei, "Ancient Chinese Writing", Taipei: Taiwan National Palace Museum, 2002, p 60

父長制の父権制社会に位置づくものである。この根源的宇宙観の創世神話では、造物主は男神であり、その先に遡ることをしない。この通念を覆したのが、バハオーフェン (Johann Jakob Bachofen) の『母権制 (Das Mutterrecht)』(1861) であり、女神中心から男神中心の根源的宇宙観への移行を整理してくれたグレーヴス (Robert Graves) の『ギリシア神話 (Greek Myth)』(1955) であり、さらにバハオーフェンから現代までの母権制と神話の研究成果をまとめてくれたウォーカー (Barbara G. Walker) の『女性の神話・伝承事典 (The Women's Encyclopedia of Myths and Secrets)』(1983) である。そして、関連文献としての必読書は、上山安敏の『神話と科学』(2001)、フロム (Erich Fromm) の『愛と性と母権制 (Love, Sexuality, and matriachy)』(1994) である。

以上の文献を基本図書にして、母系・女家長制の古代母権制社会の根源的宇宙観とはいかなるものであったのかを思索してみる。その思索シナリオに実証性はあるのかと問われれば、それは無いとしか答えようがないが、今日の混迷する世界、社会の問題の核心をとらえ、問題解決の手がかり、糸口になれば、そのような思索、そして、大学における講義にも、それなりの意義があるのではないだろうか。

4. 母権制社会研究の関連小史

この 150 年の間に、インド・ヨーロッパ祖語の研究が進んだこと、ギリシア・ローマ神話は詩人の単なる空想ではないこと、オリンポス神話に支えられた父権制社会の前に、長い月女神一族に支えられた母権制社会があったこと、紀元前 1700 年～1500 年頃にエーゲ海にて 2 度にわたる大爆発があったこと、21 世紀の父系・家父長制の父権制社会が直面している問題解決には母系・女家長制の母権制社会からの見直しが重要であること、そして、ホモサピエンスに関する自然科学の研究が飛躍的な成果を挙げていること——これら一連の研究成果が相互に関連しながら知れ渡りようになってきた。年代を追って本論に関係する小史を記しておく。

1786 ウィリアム・ジョーンズによる「ヒンズー教徒について」の講演。インド・ヨーロッパ祖

語について初めて発表。

- 1844 スミス『ギリシア・ローマ神話、及び伝記辞典』の出版。スミスはこの著書で、トロイ、クノッソスは詩人の空想であると記述した。この著書以降のギリシア・ローマ神話は複雑多岐な物語で、ヘレネスのギリシア人の精神の幼さから生まれた荒唐無稽 (chimerical) な幻想という扱いを 20 世紀の半ばまで受けてきた。
- 1856 バハオーフェン「女権制の本質」の講演。
- 1861 バハオーフェン『母権制』の出版。
- 1871 H.シュリーマンのトロイア遺跡の発掘。
- 1876 H.シュリーマンのミケーネ遺跡の発掘。
- 1900 A.エヴァンスのクレタのクノッソス遺跡の発掘。線文字Aと線文字Bの発見。
- 1953 建築家マイケル・ヴェントリクスと言語学者ジョン・チャドウィックが線形文字Bをギリシア語として解読。
- 1962 R.グレーヴス『ギリシア神話』の出版。
- 1983 B.ウォーカー『女性の神話・伝承事典』の出版。
- 1994 E.フロム『愛と性と母権制』の出版。
- 2001 上山安敏『神話と科学』の出版。

以上の小史を念頭におき、バハオーフェン、グレーヴス、ウォーカーを基本文献とし、この 3 冊の研究成果を肯定的に受け入れ、その上でこの 3 冊を土台に思索を始めると、いかなる素描 (仮説) を描くことができるか。

すでに、この 3 冊に関しては国内外で高い評価がなされている。簡単にその評価を紹介しておきたい。

バハオーフェン『母権制』

スイスのバーゼル大学の法学者・古代学者であるバハオーフェン (Johann Jakob Bachofen, 1815-1887) の主著である『母権制』は、マルクス主義から深層心理、文学、フェミニズムまで大きな影響を与えた。日本では上山安敏教授のグループがこの著書をテキストに「母権制」の研究を進めている。上山教授は、この著書に影響を受けた人名をあげている。モルガン、エンゲルス、ベーベル、ゲオルゲ、クラージェス、ボードレー、ヴェルレーヌ、マラルメ、ヘッセ、トーマ

ス・マン、ゲルハルト・ハウプトマン、リルケ、ホフマン・スタール、ベンヤミン、ユング、フロム、カール・ケレーニィ、ヨハン・ホイジンガ等がある。

グレーヴス『ギリシア神話』

訳者の高杉一郎教授の解説によると、グレーヴス (Robert von Ranke Graves, 1895-1985) は、父方からオガム文字 (古代アイルランド語) 研究の流れを、母方から歴史 (レオポルド・フォン・ランケ) の流れを受け継いだ博識の文学者で、オクスフォード大学詩学教授。本書はエジプト神話、シュメール神話、ヘブライ神話、北欧神話、ケルト神話等を精査した上でまとめられたもので、今日、最も権威あるテキストとして評価されている。本書に対し、日本でも中野好夫、呉茂一、高津春繁の文学者が第一級の評価を与えている。

ウォーカー『女性の神話・伝承事典』

ウォーカー (Barbara G. Walker) によるこの著作は、1986年に London Times の Book of the Year を受賞し、数々の絶賛書評を受けた。今や、女性研究の必読書である。A、B、C順の項目説明事典であるが、バハオーフェンの『母権制』以降の古代研究の重要文献のすべてを網羅している。この著書を抱えて、グレーヴスの『ギリシア神話』、さらにバハオーフェンの『母権制』の著作の中に入り込み、思索をすると、先史時代がさまざまな形で見えてくる。例えば、インド・ヨーロッパ言語文化圏の太古が、ウォーカーの比較語源研究と神話の出自研究から浮き彫りになって現われてくる。

5. 母権制から父権制への変遷

母権制から父権制への社会変動はどのようにして起きるものなのか。バハオーフェン、グレーヴス、ウォーカーの順に、その要旨と解説を記しておきたい。

バハオーフェン『母権制』

Die vorliegende Abhandlung bespricht eine geschichtliche Erscheinung, welche von Wenigen beachtet, von Niemand nach ihrem ganzen

Umfange untersucht worden ist. Die bisherige Alterthumswissenschaft nennt das Mutterrecht nicht.

本論考は、今日までほとんど注目されたことがなく、またその全体が研究されたことのない歴史的現象を扱っている。これまでの古代研究では、母権制が取り上げられることはなかった³⁾。

この書き出しで始まる大著で、バハオーフェンは何を意図したのか。第一に母権制の原理を明らかにすること、第二に母権制の低次の段階 (Aphrodite 支配) と高次の段階 (Demeter 支配) の関係を示すことであった。母権制社会から父権制社会への移行は、特定民族に固有に見られる歴史現象ではなく、どの民族にも共通する普遍的な歴史現象である。母権制は人間本性の同質性と法則性に根ざしたものであるからだ。

この母権制社会の研究は、先史時代を対象としているので、神話伝承、その記録が手がかりになる。神話は古代世界をよく反映し、表現しており、史実を直接啓示したものである。そして、神話の変容過程を究明することにより、歴史の発展段階を生き生きと物語るができる。

母権制社会の普遍原理とはいかなるものか。第一に、家族、一族は女家長制 (matriarchal system) により支配され、その原理はまず「より崇高な尊厳は左側 (平和・自由・平等のシンボル) に宿る」という観念が尊重されたことである。風俗、風習、生活文化に、この「右側に対する左側の優位」が貫かれていた。第二に、夜の胎内から生まれた昼に対して、夜が優位であるという観念である。月は太陽よりも、死者は生者よりも、葬礼は祝祭よりも優位におかれた。一日は夜を基準にし、戦争、会合、裁判、祭儀はすべて女性たちの手によって夜に行なわれた。第三には、家族、一族は母系の命名で継承され、子どもの身分は母の身分により決まり、母方の姉妹・兄弟の親密な関係が支配していたことである。中でも女子が財産を相続し、償うことのできない大罪は母親殺しという観念であった。第四に、後の父権制における「父性的—天界的」人間観と対比して、「母性的—大地的」人間観が生活法則を貫いていた。そこでは、「宇宙 (天文) 原理 = 自然 (生物) 原理 = 女性原理」で、その原理を母性が支えていた。

母権制社会の宗教とはいかなものであったのか。女神を崇拜する宗教が、母権制を最も尊厳あるものとし、生き方も社会のあり方も完全に女神の世界と一致していた。その一体化は女神たちを意識できる女性のすぐれた内的特質によるものであった。女性たちの教養や文化も、また生活技術もすべてこの女性の内的特質によるものであった。

母権制社会から父権制社会へ移行するまでに、どのような構造上の変遷があったのか。バハオーフェンは、この変遷過程を三段階に分けて説明し、第一と第二、そして第二と第三段階の間に、2つの中間段階を挙げている。

第一段階は Aphrodite 的女性支配である。バハオーフェンはどの民族においても、無秩序な両性関係と娼婦性的生活の存在した痕跡のあったことを指摘している。正確に言えば、バハオーフェンは、この第一段階を母権制以前の低次の段階と位置づけ、第二段階以降を規律化された高次の段階と区別している。人類の始原において無秩序な両性関係と神殿娼婦が存在していたことを記述している。しかし、このバハオーフェンの認識に対して、私たちは本論においてこれとは異なる、Aphrodite のより肯定的で自然な母性の秩序（自然法）という解釈がありうることを素描してみようと思っている。バハオーフェンはプロテスタントであり、古代母権制社会から古代父権制社会への移行、そして、キリスト教、宗教改革を経た近代父権制社会への変遷を文明の進歩と認識しており、嫁資設定の収入目的の「娼婦（Hetärismus）」という言葉使いはその歴史観から出てきたものであろう。Aphrodite 的な性的恩寵（khāris）の真意は、嫁資設定の収入目的の娼婦では説明しきれないからである。

中間段階は Amazon 的女性支配である。始原の無秩序な両性関係は、いずれ、男性の横暴な性欲によって品位を奪われることになる。女性たちは安定した地位と純粋な生活を求め絶望の果てから武器を取り、抵抗とへ駆り立てられた。これが Amazon 的女性支配にならざるを得なかった背景である。Amazon 的女性支配は、月女神に従い、永遠に満ちかける月の表情は、まさに死をもたらす恐ろしい Gorgon の三姉妹の表情であった。しかし、Aphrodite 的女性支配、Amazon 的女性支配を支えた食料事情は、野性的・自然的生産に依存し、「母なる大地」から成長する「野生生

物」頼りの泥土的沼沢地生活であったが、やがて農耕生産に移行していく。

第二段階は、Demeter 的女性支配である。穂や穀粒、根菜、果樹などの植物を中心にした農耕生活は、農耕神の Demeter と女家長の女性支配の下での規律ある婚姻制度を生み出すことになった。農耕生活には男手を必要とする。そこで、厳格な規律に従う婚姻制度ができたのである。仕事の手順はすべて女性が決める。それは、季節、月、週がすべて、「宇宙原理＝自然原理＝女性原理」でとらえることができるからである。しかし、バハオーフェンによれば厳しい規律の Demeter 的女性支配と自由で自然な Aphrodite 的女性支配との間に長い対立があったのであり、葡萄栽培の普及と葡萄酒の祭りの Dionysus 宗教が広がるにつれて、女性たちを再び Aphrodite 的な性の解放に目覚めさせたのである。

中間段階は Dionysus 宗教支配である。Demeter 的女性支配は、婚姻制度を敷くことにより、男性に家族、社会における役割を与え、男性もよくその期待に応えた。しかし、Dionysus 宗教は、女性たちを Aphrodite 的な原理に回帰させることになり、男性たちの尊厳を奪いさってしまったのである。ここに規律ある Demeter 的な母性を象徴する麦穂とパンが、再び生殖の神の豊かな果実を象徴する葡萄酒の前に屈したのである。Aphrodite と Dionysus らが手を結んだミルクと蜜と水が再び官能的なトランス・エクスタシーの境地を与えてしまったのである。男性たちは、Demeter 的な原理の下で得た幸せをいかにして取り戻すか。そこで第三の Apollon 的な段階への移行が始まるのである。

第三段階は Apollon 的な男性支配の原理である。規律を遵守するということは精神性、道徳性の問題である。男性たちは男神を創造し、男神に支えられながら精神性の高い「父性的—天界的」原理を立てて父系で家父長制（patriarchy）の父権制社会への転換を企てたのである。

バハオーフェンは、母権制社会から父権制社会への移行を文明の進歩と認識しておりながら、母系による女性支配の母権制に強い愛情を寄せている。上山安敏教授は、バハオーフェンにとって、

Apollon 的な明るい、知性的な、健全な地上のギリ

シアの光とは違って、暗い陶酔的な、オルギア的な闇の神性が母権制とともに浮かび上がった。バハオーフェンには、男性国家が母性の秩序を圧倒したとき、犠牲にされたあらゆる価値に、愛惜の感情、愛と宗教生活の手づくり、死への敬虔な受容、滅びゆくものへのエレジーがどうしても感じられるに違いないのである⁴⁾。

と教授自身の気持ちを重ねて述べている。

以上のバハオーフェンの理論枠組を次にまとめておく。

第一段階 Aphrodite 的女性支配

中間段階 Amazon 的男性排除

第二段階 Demeter 的女性支配

中間段階 Dionysus 的女性解放

第三段階 Apollon 的男性支配

グレーヴス『ギリシア神話』

バハオーフェンは、神話・伝説は、民族の発展とともに変容し、どうしても複雑多岐になるものであるが、その改変の跡をたどることのできる研究者にとっては、時代の現実を思索するまたとない資料であるという考えを述べている。グレーヴスはまさにそのような研究者であるといつてよい。グレーヴス自身、ギリシア神話研究に関して、興味深い所見を述べている。

出典が古ければ古いほど権威があると推定するわけにもいかない。ヘシオドスやギリシア悲劇詩人よりも、ローマ時代、いや13世紀に書かれたものの中により優れているものがある⁵⁾。

グレーヴスは自らの著作について、その自信を語っているのではないが、複雑多岐なギリシア神話解明の必読書であることには間違いない。グレーヴスは、母権制から父権制への変遷過程を4段階に分けてとらえている。

第一段階は女家長制 (matriarchal system) と自然物崇拜のトーテム (totem) 制度の時代である。石器時代、青銅器時代のこの女家長制の社会では、中心的神は「新月→満月→旧月」の三相一体の月女神であり、不死、不易、万能の存在であった。女神の化身としての女家長、そして女性たちにとって恋人はいた

が、ただ楽しみだけの関係でしかなかった。男性は、女家長、女性を畏れ、敬慕し、服従していた。一族をまとめる場所は「炉辺」であり、母性は最高の神秘であった。宇宙原理、自然原理、女性原理を貫いている母性の神秘に、すべては従っていた。ところが、交接や出産の関係が明らかになり、それが男性たちにも知られるようになるにつれて、男性の地位も向上するようになった。

第二段階は母系の王政 (matrilineal sacred monarchy) である。この段階で、「女王—聖王—後継者」という関係ができあがったのである。それは、どのようなプロセスを経てのことか。月女神の化身としての女王が、冬至の頃に豊饒多産のために、側近の男性が生贄 (hostia → host) にされ、彼の血が「母なる大地」にふりまかれ、彼の肉は動物の仮面をつけた巫女たちに生で食べられたのである (cannibalism)。その男性の生贄は、女性たちから食べられ再生することができると信じていたのである。そして、生贄になった男性は蛇に生まれ変わり神託を司る。やがて、側近の次なる男性の恋人が女王の魔力のある衣装を身につけて名代を務めるようになる。太陽にたとえた、聖王 (聖婚) の制度化 (hierosgamos) である。しかし、それでも女家長制の時代と同じで、太陽は月の庇護のもとにあり、月女神の化身の女王は聖王が統治期間を終えると次の後継者にその地位を継がせ、生贄にすることには変わりなかった。しかし、聖王たちが力をつけてくるにつれて、生贄の代理、また動物で済ませる聖王が出てきたのである。

第三段階は父系の王政 (patrilineal sacred monarchy) である。プレヘレネスが住んでいたギリシアの地域に、ヘレネスのアーリア系の種族が侵入し、さらに女神に対する男神を創り出し、生贄となる聖王制を父系による王政に変えてしまったのである。しかし、男神のいなかったところに新しく作り出すのであるから、女神、女神の化身としての女王 (一般には男性の側からはニンフの呼称)、母縁の血縁一族 (男性も含む) から強い執拗な抵抗のあったことは言うまでもない。Zeus が Hera を強引に妻にしてから、女性は予言能力を除くあらゆる能力を略奪され、ヘレネスの男性たちから家財道具同様にみなされるようになってしまった。

第四段階は家父長制 (patriarchal system) であ

る。自分たちの一族は Zeus 一族の男神を先祖神とする由緒ある家柄なのだと言乗るようになった。この段階に入ると、女神よりも男神優位の作為を加え、そして、Zeus を主神とするオリンポス神話に作り変えてしまったのである。女家長制、女王の王政の時代の厳しい紀律までも (e.g., 母親殺しの大罪、聖王の生贄の儀式)、巧妙な方法 (e.g., Dionysus 祭りのギリシア悲劇等) でなし崩されることになった。父系の王政、家父長制の頃に、「書き言葉」の文字ができ普及したことも、過去を書き換えることに大いに用いられるようになった。

ウォーカー『女性の神話・伝承事典』

この事典はある問題意識を抱いて、項目 (ideas) を次々と繋げて読み込んでいく事典である。例えば、この後に続く本論に関連づければ、月女神とその一族の女神しかいなかったところに、いかにして男神が創り出されたのか。そこで、「両性具有 (androgyné)」を引くと、そこに「Hermaphrodite」の Hermes と Aphrodite の性的結合の意味が出てくる。そこで、グレーヴスの『ギリシア神話』とウォーカーの著書で Hermes と Aphrodite の出自と性格を調べると、Aphrodite から性的結合を通じての Hermes への「創造の言葉 (logos)」のプレゼントの話が出てくる。そこで、logos を引いてみると、原初の logos は Kali Ma の Mantra、Om であることが分かる。

以上のように、次々に項目の連鎖の糸を繋げると、インド・ヨーロッパ言語文化圏の父権制社会の前の母権制社会の根源的宇宙観の「より源流へ、より本質へ」思索を深め広げることができる。その意味では強い問題意識と好奇心に案内されて、自由自在にどこへも行くことのできる encyclopedia である。

今回の本論に関して言えば、私たち 2 人の中心の研究課題は、古代母権制社会における宇宙原理、自然原理、女性原理を共通に支えている根源的宇宙観 (= 母性力) の研究である。それでは、本論に入りたい。

本論 古代母権制社会の根源的宇宙観

1. Aphrodite から Hermes への logos の贈り物

今日、両性具有を意味する androgyné と hermaphrodite は、医学的に性分化異常症に分類され、日本では「性分化・発達障害」という述語を与えられている。

しかし、この言葉の古層には興味深い意味が潜んでいるのだ。

androgyné は、プラトンの『饗宴』の Eros 論でも語られており、月女神から生まれた両性具有者で、andro (男性) と gyné (女性) の合成語である。文字通り原初においては、両性が結合、合体し、愛の絆で結ばれていたという意味である。この両性具有者が神々を脅かす力をつけたので、Zeus が両断したところ、それぞれの半身が元に戻ることに憧れを抱き、身体を一つにする欲望に駆られるようになった。日本でも、この件は「ベターハーフ」の話で結婚披露宴の祝辞でよく使われている。もう一方の hermaphrodite も両性具有の意味に無造作に使われているが、これはギリシア神話の Hermes と Aphrodite の合成語である。なにゆえに、この神々が結合、合体し、愛の絆で結ばれなければならなかったのか。

私たちはこの謎解きの鍵を、ローマの考古学博物館、ボルケーゼ美術館に展示してある Hermaphrodite の彫刻⁹⁾から探し出すことができる。この彫刻では左右半身が Aphrodite と Hermes で表現されている。一般的なギリシア神話の説明では、

Hermes: 神々の使者で翼のついた靴と帽子と杖を身につけて表現され、商業・学問・芸術・音楽・雄弁・発明・競技等を司り、羊の群れ、旅人、交通の守護神。ローマ神話では Mercury。

Aphrodite: 弓と矢を持つ Eros を従えた愛と美の女神。ローマ神話では Venus。

とある。詳しいギリシア神話に関する文献で調べると、どの神々の出自も、また性格もゴタゴタして複雑で、どうしてもオリンポスの十二神以降のこのすっきりした説明に頼りがちになる。ざっとその説明の神々の役回りをあげておく。() はローマ神話名。

Zeus (Jupiter): オリンポス山の家父長の主神。稲妻の神。頭から Athene を、太腿から Dionysus を産んだ。

Apollon (Apollo): 太陽神。Muse の女神の指揮者。予言・医術を司る。

Hermes (Mercury): 前述。

Ares (Mars): 軍神。

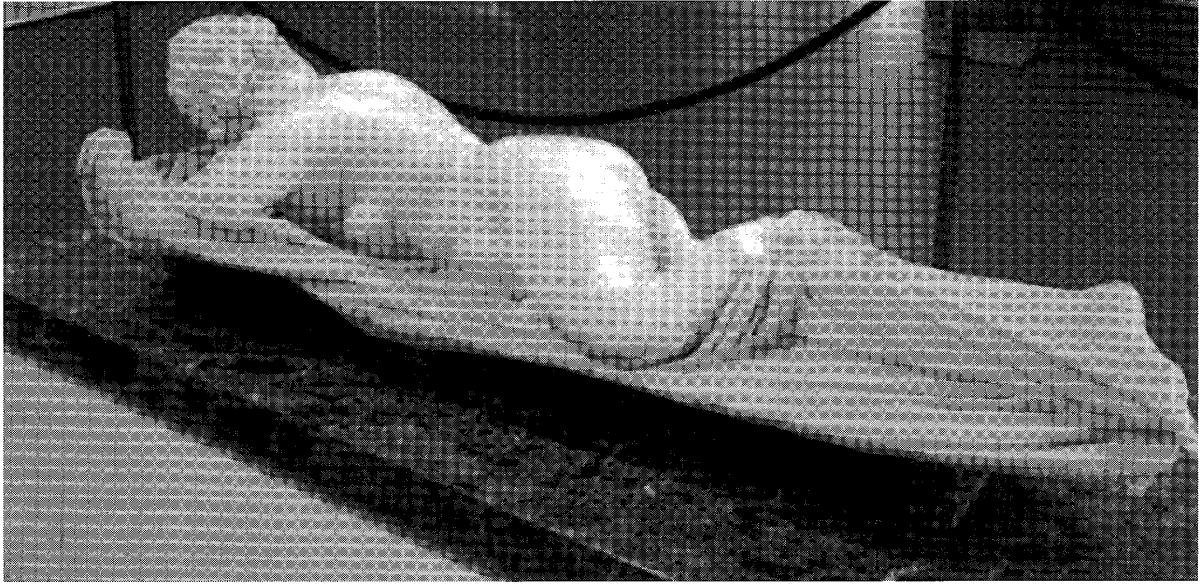


図3 両性具有の Hermaphrodite

出典：http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Reclining_Hermaphrodite.jpg

- Hephaestus (Vulcan)：火と鍛冶の神。
- Poseidon (Neptune)：海神。
- Dionysus (Bacchus)：祭神。ワインと演劇の神。
- Hera (Juno)：Zeusの妻。大地母神。
- Demeter (Ceres)：農耕の女神。
- Aphrodite (Venus)：前述。
- Athene (Minerva)：知恵と戦争の女神。
- Artemis (Dianna)：月女神。狩猟の女神。森林・野獣の守護神。

時に、炉の女神の Hestia (Vesta)、大力無双の神の Hercules が入ることもある。

しかし、このオリンポスの十二神の説明からは Hermaphrodite の謎解きはできない。この説明は古代ギリシアが母権制社会から父権制社会への移行過程でできあがったものである。謎解きのためには、母権制社会の宗教と政治の「まつりごと」の時代にまで遡らなければならない。

原始原初においては、まだ交接と出産は結びついておらず、宗教体系の中に男神・祭司は存在していなかった。宇宙を創造した一柱の月女神とその化身としての巫女の女家長 (matriarch) だけであった。この時代に女性たちは恋を楽しんだが、ただそれだけのことであった。交接と出産の関係が認識されるようになり、Aphrodite がその女神であることがわかって、

宗教能力と官能能力において秀でている女性たちの勢力は男性たちをはるかに凌いでいた。次の Demeter 中心の農耕社会にあつては、厳格な女性支配の婚姻制度が敷かれ、すべてが母系、女家長中心で、男性たちは従属的な立場でしかなかった。

このような母権制社会にあつて、Hermes は神ではなく、単なる男根の柱、男根の石造でしかなかった。一方、Aphrodite は、文化・文明を創造する根源の力を有し、自然法・自然秩序を支配する偉大な月女神であった。

ところが、長く従属的な立場を強いられていた男性たちが、母権制社会から父権制社会への転換を企て、その移行過程で取り組んだプロジェクトが、父権制社会を支えてくれる男神の創造であった。いかにして権威ある男神を創造するか。そのモデルが文化・文明を支配する力を有する Hermes の創造プロジェクトであった。Hermes の本質は立派な男根である。万物創造の月女神の性生活を満足させることができるのは Hermes をおいていない。Aphrodite は、言葉の魔力、創造の言葉、文化・文明を創り出す根源の言葉 (logos) を有する月女神である。その恩寵 (kharis) をいただく方法が、性的結合であった。Aphrodite の根源の力は、logos という「創造の言葉」に凝縮しており、その logos が「母なる大地」と母親から万物を産み出させるのだ。女性たちは、Hermes のような立

派な男根を有する男性たちを「男らしい」と高く評価し、その語源の vir が virtue となったのである。この関連で言えば、「契約」の testament、「証言する」の testify、「証言」の testimony、「試験」の test、そして「睾丸」の testicles のいずれも根底に共通する意味を持っているということである。今なら「神に誓って」とか、聖書に手を置いてにあたるが、そのことを attest といっていた。

Hermes は父権制社会に向けての家父長 (patriarch) たちの期待通りの男神に成長し、それまで絶対不可能と考えられていた「創造の言葉」の「精制的 logos (logos spermatikos)」の能力を身につけ、Zeus の意向を化肉にする代行神になったのである。その後、家父長たちは、父権制社会を創りあげるために、Hermes の性的結合の方法をモデルにして、男神を次々に創り、自分たちはその神々を先祖神とする由緒ある父系の一族なのだ、その称号を名乗るようになった。言葉使いにも、振る舞いにも変化が現れるようになった。例えば、「内に宿る創造の女神」を意味する idea よりも、「父親が子をもうける」という男性的意味合いの concept を使うようになった。父親は自分が与える靈魂 (言葉・名前) は、大気 (atomos) の息 (atman) であり、子どもに三回息を吹き込むと、つまり、名前をささやくと父権が確立すると切り変えたのである。

家父長たちは、「創造の言葉」の logos を手に入れると、男神主導の宗教の体系に作り変え、やがて『旧約聖書』では、造物主が男神になり、『新約聖書』では「太初に言 (logos) あり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り」と自信をつけたのである。さらに、アリストテレスが、人間の本质は logos があると説き、時が経つにつれて、logos は月女神自身から切り離され、中立的な学問の基本原則としての理法・理性・法則を指し、論理学 (logics)、生物学 (biology)、言語学 (philology) 等の「～学」「～論」となったのである。

2. Kali Ma による原初の Logos 「Om」

話を戻すと、それでは「創造の言葉」logos は Aphrodite だけの能力であったのか。そうではない。それは月女神の能力で、月女神の呼称は地域で違っていたし、また同じ地域でも呼称はいくつもあった。

Aphrodite はエーゲ海、ギリシアの呼び名で、その中心はキプロスのパポスにあった。また、logos にあたる言葉にもいろいろあった。

そもそもの原初の logos はどの地域からどのようにして出てきたものなのか。それはインドの原始ヒンズー教 (タントラ教) の女神 Kali Ma の「創造の言葉」の Om から始まったのである。Kali Ma が「創造の言葉」の Om を唱えることによって万物を創造したのである。しかし、Kali Ma は自ら創造した万物を貪り食う、恐ろしい破壊の女神でもあった。それが「大なる破壊の Om」の Omega である。Kali Ma が創ったサンスクリットのアルファベットは、創造の文字 Alpha (A) で始まり、破壊の文字 Omega (Ω) で終わる。Omega は原始ヒンズー教 (タントラ教) の馬蹄形の女陰の門の Ω である。もちろん、Kali Ma は破壊の死の Omega で終りにしたのではない。「生→死→再生」という永遠に生き続ける循環を、宇宙原理、自然原理、女性原理と定めたのである。

Kali Ma が生んだサンスクリットのアルファベットは 50 の文字からなり、この文字で語られた呪文が「力ある言葉」「聖なる言葉」「創造の言葉」の Om であり、Mantra (真言) である。この Om がギリシアの原初の logos にあたる。しかし、Om の言葉もギリシアにおいて使われており、神殿には宇宙の中心を意味する Omphalos の石を保持していた。Om はどの地域でも、宇宙原理、自然原理、女性原理の基本で、例えば、アラビアでは Umm、ケルトでは Omh、マリブでは Aum であった。エジプトでは女神 Mut の「創造の言葉」を met と言い、Hermes の場合と同じように男神 Thoth にその能力を恩寵として与えた。この met の言葉も広い地域で使われ、例えば、インドでは medha (女性の叡智)、ギリシアでは metis (叡智)、リビアでは Medusa (叡智の女神) であった。この Medusa はカナン人、アモリ人、シリア人、エジプト人、ヘブライ人、ギリシア人、フェニキア人の間では、Anath、Anatha、Anat、Neit、Athenna、Aynat、Neith、Athene 等の呼称で崇められていた。

後のキリスト教の父権制社会になってからは、logos は原初の意味を失い、「創造の言葉」は「神の言葉 (化肉)」として、キリスト教に取り込まれ、破壊の Omega は取り除かれてしまった。その結果、現

象としては確かめようのない死後を裁くキリスト教が、月女神の宗教に取って代わったのである。父権制社会のもとでの Kali Ma が、魔女ということになり、自分の夫、自分の子どもたちを貪り食う、恐ろしい破壊の相の Omega との関わりだけが強調されるようになった。しかし、原初の Kali Ma は、Om の Alpha から Omega までを司り、さらに再生の周期を司る偉大な月女神であった。

月女神 Kali Ma の本質は「創造→維持→破壊」の周期を司る三相一体 (trinity) にある。月は夜空にあって、「新月→満月→旧月」の周期を繰り返している。これが宇宙原理である。自然原理、女性原理も「創造→維持→破壊」の三相一体に従っている。母性とは「処女→母親→老婆」の周期を繰り返すエネルギー (シャクティ) である。この三相一体の母権制社会の宗教思想は、紀元前 8000 年から 7000 年に、広い地域で受容されていたのであり、それがこの世の運命であると認識していたのだ。三相一体の「破壊」とは、Kali Ma が「時」を支配する神で、一方で「時」は生命を与えながら、他方で「時」は生命を貪り食べ、死に至らしめる。ケルトでは Morrigan、ギリシアでは Moerae、北欧では Norns、ローマでは Fate、Uni、Juno、エジプトでは Mut で、三相一体に対応する女神名を有していた。そして、この三相一体の真中の「維持」を司る女神が、月母神、大地母神、そして母親である。どの地域でも母親を真中に位置づけ、「処女→母親→老婆」に対応する三相一体の女神を立てていた。

例えば、インドでは「Parvati → Durga → Uma (Kali)」、ギリシアでは「Hebe → Hera → Hecate」「Kore → Demeter → Persephone」、エジプトでは「Maat → Hathor → Nekhbet」、ローマでは「Juventas → Juno → Minerva」、アイルランドでは「Ana → Babd → Macha」であった。いずれも、「Virgin → Mother → Crone」の「処女→母親→老婆」に対応する女神で、インドでは「Yogini → Matri → Dakini」で、月の三相一体の「新月 (new moon) → 満月 (full moon) → 旧月 (old moon)」の「創造 (creation) → 維持 (preservation) → 破壊 (destruction)」に対応していた。

もちろん、インドにおいても、母権制社会から父権制社会に移行する過程で、男神を創造し、身分・出自

を固定するカースト制度を作り、ヒンズー教を変容させはしたが消えたわけではなかった。ヒンズー教は 21 世紀においても、大きな複雑な宗教勢力を維持している。

3. 月女神の「新月→満月→旧月」の循環原理

月女神によって創造された無限に広がる大宇宙、無限に広がる大海原と「母なる大地」、そして、女性だけの能力の出産と育児、「有限の命 (bios)」を母から娘、娘から孫娘へと繋ぐ「無限の命 (zoe)」の神秘。「創造の言葉」logos から見離された男性たちはこの万物の創造のプロセスから完全に疎外されていた。「創造→維持→破壊」は、月母神、大地母神、母親だけの特権であった。宇宙原理、自然原理、女性原理の前に、男性たちは成す術が全く無かった。女性たちは、宇宙と大地と女性が、「創造→維持→破壊」の三相一体の母性力に従って連動しており、月女神がこの原理を支配していると信じていた。夜空で仰ぎ見る「新月→満月→旧月」の周期が、なによりのその証拠であった。

このようなものの見方、考え方、感受性の心の習慣 (habitus mentalis) は、インドからヨーロッパの地域まで広がっていた。月女神のことを、例えばインドでは Kali Ma、ギリシアでは Eurynome、キプロスでは Aphrodite、ローマでは Lat、Luna、Venus、シリアでは Astarte、Asherah、エジプトでは Isis と呼び崇拝していた。そもそもエジプトは「月の国」の Khemennu として始まり、ローマ帝国の前は、月女神 Lat が創り出した国の Latium であった。ギリシアでも Leda、Lada、Leto、Latona の呼称で知られていた。Aphrodite の月女神の呼称は Lat の綴りを入れた Galatea で「乳を与える女神」であったし、月女神のエジプトの Hathor、シリアの Astarte の添え名でもあった。ケルト人もゴート人も「月女神の乳の国」の Galatia の出で、月女神 Galata を崇拝していた。

ところで、この月女神 Lat は現代の私達の社会にも影響を与えているのだ。今日、ラテン語、ラテン音楽、ラテン民族、ラテン・アメリカは、どの地域でも日常語である。しかし、Latin の語源が月女神 Lat であることを知っている人は稀である。月女神 Lat を名祖とする Latium は、今日のローマの南東に位置す

る母権制の部族群であった。Latium の土地所有は女家長に権利があり、その相続権は母系の娘にあった。月女神 Lat が創造した「母なる大地」の土地区画整理を Lat の名において行い、その区画を文字通り latifundia と呼び、女家長の神聖な所有権にしたのである。女性は子を産み、育てることを自らの役割とし、同時に月女神 Lat の創造した「母なる大地」を耕し、農作物を生産し、配分し、貯蔵することを自らの役割にしている。この「母なる大地」を価値あるものにしたのは女性たちであり、その土地の latifundia の所有権は母系相続でなければならなかったのである。その名残りは今日の英単語の「相続」を意味する heir に見出すことができる。heir はギリシア語の「女地主」を意味する here で、女神 Hera を語源にしている。母権制の時代のギリシアにおいても、土地区画単位は「月女神の土地」の temenos と呼んでいた。同様のことはゲルマンについても言えた。今日、Queen は女王を意味しているが、語源はノルド語、ゲルマン語の古語の kwaen、cwene の「女家長の土地所有」を意味していた。土地所有の相続は極めて重要なことで、家系は母系でなければならなかったのだ。従って、祖先を意味する aforebears は、以前子どもを生んだ者の fore-bearers の短縮形であり、また同じ祖先・家系の extraction descent も、「子宮から出てきた者」「子宮から下りた者」の母系の意味であった。『聖書』では神につながる祖先の系図が父系で記されている。しかし、母権制社会では祖先の系図は母系で記されていた。それはこれまで見てきた語源から十分伺い知ることができる。

この伝統は妻方居住婚として長く続き、男性は執事として女家長に仕える house-band、つまり husband でしかなかったし、田畑の耕作人の husbandry でしかなかった。そのようにして、家族に入れてもらったとしても、「男らしさ」を無くしたり、働きが悪かったりしたとき、簡単に離縁される弱い立場にあった。

Latium の母権制社会で最も安定した強い絆は母系の血縁関係であった。従って、子どもにとっては、母親の兄弟、姉妹が重要であった。一般に姉妹の息子と母方の uncle (おじ) との絆は、息子と父親の絆より強く、かつ、神聖視されていた。父権制社会に入ってから、その名残は続いていた。母親の兄弟 (avunculus: 祖先の avus に由来) が、父親の兄弟

(patruus) よりも大切で、uncle の語源になったのである。キリスト教を広め、この弱い父親の立場を強くし、父系の家父長制、父権制社会に転換することが、いかに難しい企てであったかがわかる。

月女神 Lat は、生活基礎づくりだけでなく、文化の面で果たした役割も大きく、その文化遺伝子は今日になお生き続けているのだ。今日のイタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ルーマニアのラテン民族は、月女神 Lat が創り出した Latin 語による文化遺伝子を受け継いでいるから、ラテン民族なのであり、ラテン民族の言語を公用語にしているから、Latin America なのである。父権制社会になったからといって、母権制社会の文化遺伝子が全て消えたわけではない。月女神 Lat は 21 世紀の現在にあって、言語の中に、また文芸芸術、生活文化の中に、そして何よりも祭りの中に生き続けている。そのことに気づくと、父権制社会の男性支配で行き詰っているかに見える現代社会に、そして私たちの生き方に、全く新しい視点 (実際には太古の視点) を与えることができるのだ。

母権制社会にあって月女神は広い地域で「宇宙の母」であり、「月の国」「月の都」を造ったのである。最古のエジプトは「月の国」の Khemenu で、最古の神託所は「月の家」の Menhet と呼ばれていた。ギリシア人はこの Menhet の神殿を月女神の Latopolis と呼んでいた。月女神 Lat の化身の巫女が Khemenu の女王として広く知られていたのである。

今日のイスラム世界では Allah は男神であるが、母権制社会のアラビア世界の時代には月女神 Lat を畏怖・畏敬する Al-Lat であった。また、経典の Koran は今日のイスラム世界で人々の心、精神の強固な支えである。しかし、マホメットが母権制社会の処女神 Kore の一族の出身で、「Kore の子どもたち」という部族のコレシテ人がメッカの Kore の神殿を守っていたのである。そして、女神 Kore の言葉が Koran であったのだ。もちろん、父権制社会において男性に有利なように書き換えが行なわれているが、この経緯を知っている人は今日のイスラム世界にも少ない。Kore はギリシアの三相一体の「Kore → Demeter → Persephone」の処女相であるが、呼称が実に多く、Ker、Car、Q're、Cara、Kher、Ceres、Core 等があり、Kali Ma との関係では Kaur、Kauri

がある。Koreから英単語のcarnival(謝肉祭)、cereal(穀物)、corn(ムギ、トウモロコシ)、kernel(穀粒)、core(芯)、carnal(肉体的)、cardiac(心臓の)が派生したのである。この中で重要な単語は「心臓の」cardiacである。ギリシア語ではkardia(ガリポリ半島のKoreの都市Cardia)、ラテン語ではcorで、Koreは「宇宙の心臓(Kardia ton kosmos)」であり、また「母系の血縁一族の心臓」の意味であった。処女神Koreが何ゆえに宇宙と母系一族の「心臓」の意味になったのか。

4. 「Heraの楽園」から「Edenの楽園」へ

『旧約聖書』の創世神話は、原始原初は暗闇で、混沌としたカオスの状態にあったと語っている。このイメージは女性の子宮から規則的に流れ出る経血から連想されたものらしい。女性の子宮から流れ出る経血(menstrual blood)に創造物の根源があり、子どもは経血が子宮の中で濃くなり、凝固して生まれるのである。同じように、造物主の月女神が産んだ大宇宙もまた、女神の子宮の中で経血が濃くなり、混沌としたカオスの状態から凝固して誕生したのである。

母権制社会では、経血は「月女神の血」であって、「創造の言葉」logosに従った「創造物の根源」であると信じていた。『旧約聖書』は「主は土の塵で人を形造り、その鼻に命の息を吹き込み、アダムを造り、アダムのあばら骨からエバを造った」と語っている。ところが、語源を遡ると全く違う神話になる。アダムはAdamと綴るが、これは月女神の経血が凝固してできた「月女神の血の粘土」のAdamahからとったものである。インド・ヨーロッパの言語文化圏で、damは「経血」「月の血」のことで、同時に、「母親」「女性」のことであった。例えば、dame、madam、damsel、la damaがある。従って、『旧約聖書』の単なる「土の塵」からアダムが創られたのではない。同じことがエバについても言える。エバのEveのそもそものはインドのKali Maの呼称で、「万物の母」の意味である。Eveはラテン語ではEVEで、ヘブライ語ではYHWHである。このYHWHの語根はHWH(he-vau-he)で、「存在」「生命」「女」を意味し、「万物の母」ということである。従って、EveがAdamの母であると認識する方が無理が無く自然である。ざっと、それぞれの地域でEveをどのように呼んで

いたかをあげておく。

ヒッタイトではHawwah(生命)、ペルシアではHvov(大地)、アラムではHawah(全生物の母)、アナトリアではHebat、Hepat(処女大地)、ギリシアではHebe(処女大地)、セム語ではhayy(生命)である。しかし、母権制社会から父権制社会への転換の企ての中で、YHWHは男神、少なくともHermesとAphroditeの場合のように両性具有神(男神が女神より優位を前提)の造物主へ変えられたのである。その呼称は実に多く、Jehovah(エホヴァ)、Yahu、Jah、Jeud、Ieu、Yahweh、Jahveh、Yaho、Yah、Jahi、Iao等あり、またYeshua、Joshua、JeudからJesusへ変化したのである。『旧約聖書』の創世神話の造物主は、キリスト教美術で見る限りは男神である。しかし、単語の出自を見ると男神の中に女神が存在しており、男神の姿形をしていても、その意味するところは女神と結合して、その創造の力を恩寵としていただき続けなければならないHermesと同じ両性具有神なのだ。

月女神は「創造の言葉」のlogosと「創造物の根源」の経血を司る造物主であった。月女神の経血が濃くなり、凝固して「母なる大地」ができたように、子どもは母親の子宮の中で経血が濃くなり、凝固して生まれるのである。大宇宙のマクロコスモスと母親のミクロコスモスの営みは同じである。母権制社会ではこのように認識していた。なお、ドイツのヘッケル(Ernst Haeckel, 1834-1919)の「個体発生は系統発生を繰り返す」という現代科学の研究成果を関連づけてみると、「魚類→両生類→爬虫類→哺乳類→ヒト」へという脊椎動物の5億年の進化のプロセスを、母親は胎内でわずか280日の間に追体験をしているのであり、マクロコスモスとミクロコスモスのこの神秘的営みを太古の女性たちが洞察していたことに驚かざるを得ない。

母権制社会の女性たちは子宮の中に、「28日×13ヶ月+1日=365日」の暦を有しており、この暦が月の朔望と星座の動き、潮の干満と連動していることを熟知していたのだ。少女が初潮を迎えることを「花を生む」と言っていた。これは規則的に経血が子宮から「流れ出る」ことがflowであり、「流れ出たもの」がflowerということであった。その経血が子宮の中で濃くなり凝固して子どもになることを果実のfruitに

譬えていた。その意味では、人間の身体は「花」からできていると言うことであった。

子どもは経血が凝固して生まれる。その経血は心臓 (heart) が創り出したものである。そこで、エジプトでは「妊婦は心臓の下に子を宿す」のであり、「心臓は生命の源泉」だと考えて、子どもを「心臓の子」と呼んでいた。エジプトでは、心臓は ab で、象形文字では「踊り」で表していた。これは心臓の拍動から連想したものである。女神 Isis の夫の Osiris は、女神の心臓の中で踊っている姿でよく表現された。この表現は広域にわたり、例えば、インドの Kali Ma と Shiva との間にもみられた。男神の踊りが静止することは死を意味し、女神が再生させてくれるまで、仮死でいなければならない。エジプトでは死者が再生する象形文字を、円の中に星の五芒星形 (pentacle) を入れて表現し、「冥界の子宮」と考えていた。この象形文字はリングを横に輪切りにした時の形と同じである。まさに円の中の五芒星形である。この形がリングは女神の不死の心臓であり、処女神 Kore が大地母神 Demeter の中心に隠れているという連想を生んだのだ。中心、芯を意味する core は、今日においても重要な概念であり、その語源が処女神 Kore にあることは興味深いことだ。リングの芯の Kore の「大宇宙の心臓」と「母系一族の心臓」が、三相一体の「創造 (Kore) →維持 (Demeter) →破壊 (Persephone)」の周期、循環を支えていると連想したのだ。したがって、リングは単なる果実ではなかった。ラテン系の饗宴は、「卵で始まってリングで終わる」と言われているが、創造で始まって再生への期待で終わることを意味している。

このように見てくると、『旧約聖書』の Adam と Eve とリングと蛇の神話にも、Hera と Aphrodite と Athene の美神コンテストの「パリスの審判」の神話にも、意図的な作為があったと言わざるをえない。

ギリシアの「Hebe → Hera → Hecate」の Hebe は Eve にあたる。その母神の Hera は西方に「生命の木」のリング園を持ち、蛇に守らせていた。蛇はどの地域でも、脱皮変身 (metamorphose) し続ける不死の象徴として、また、大地母神 Hera の子宮の Delphi (デルポイ) にあって、経血の楽園 (腔) に棲みつき、自然の叡智、予知の能力を身につけた象徴として崇められていたのである。アラビア語の Eve

(Hawah) は、「生命」の hayyat、「蛇」の Hayyat と結びついている。明らかに、東方の「Eden の園」(ペルシア語では Heden) のモデルは Hera の西方の「リングの楽園」であり、その「Eden の園」を守り続けてきたのは蛇である。この考え方は自然であるが、しかし、『旧約聖書』では、「Eden の園」を守っていたはずの蛇が一番狡猾な生き物にされている。蛇が造物主の神が禁じた楽園の中央の木のリングを Eve に食べさせ、Eve は Adam にも食べさせた。そのとき、蛇が Eve に話しをした内容は、「あなた方は決して死にません。あなた方の目が開け、あなた方が神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」ということであった。この内容は、女神 Hera から見るならば、Eve と Adam に与えた恩寵である。それなのに、この神は Eve と Adam を楽園から追放し、蛇に決定的な罰を与えたのである。この『旧約聖書』で、神が蛇に与えた罰は、蛇を崇めていた母権制社会の宗教体系にとって大打撃を与えることになった。

『旧約聖書』よりも古い母権制社会の創世神話では、月女神が鳩に変身し、世界卵を産み、それを世界蛇がぐるぐる巻きつけて孵化して大宇宙を創造したと語られている。インド・ヨーロッパ言語文化圏では、蛇は月女神にとって大切なパートナーであった。母権制社会をリードしたクレタ島のクノッソス宮殿からは、蛇女神、蛇使いの巫女などの生き生きした像が発掘されているし、叡智の女神の Medusa の頭髮は無数の蛇であった。エジプトの女王は「ナイルの蛇」という添え名を持っていた。また Hermes の杖は「男らしい」男根を意味し、その杖に蛇が巻きついている。Dionysus はテュルソスの先に松かさの亀頭をつけた笏杖を持っている。これも男根としての蛇を意味している。プルターク『英雄伝』は、アレキサンダー大王の母のオリンピアスが蛇と交接しているところを父のフィリッポスが見て驚いた様子を記している。母は熱心な Dionysus の信女であった。蛇はこのようにどの地域においても、自然の叡智と Eros の大切な役回りを担っていた。そもそも蛇は脱皮変身して若返る力を有している。古い皮を脱ぎ捨て、若々しい蛇に変身することができる。その古い脱ぎ捨てた「抜け殻」は「老人」を意味し、ギリシア語で geras と言った。今日の英単語の gerontology、gerontology (老年学)

の語源である。

それでは次に「パリスの審判」の作為について考えてみたい。一般には、トロイ戦争の原因となった「パリスの審判」は次のように語られてきた。Hermes はパリスに Hera、Athene、Aphrodite の「美神コンテスト」を行なわせ、審判を命じた。Hera はパリスに自分を勝者にしてくれるなら全アジアの王にするという約束をした。同じように Athene は戦争における勝利と叡智を、Aphrodite は世界一の美女のスパルタのメネラオスの妻ヘレネとの結婚を約束した。パリスは勝者として Aphrodite を選び、黄金のリングを与えた。そして、パリスはヘレネを手に入れトロイへ帰っていった。しかし、ヘレネを連れ去られたスパルタのメネラオスは全ギリシア軍の支援を得て、妻を取り戻すための長期の戦争に入ったのである。

グレーヴスによれば、この戦争は当時莫大な富をもたらしていた黒海貿易の覇権をめぐる戦いであり、母権制社会トロイと父権制社会に移行しつつあったギリシアとの戦いであった。紀元前 1500 年頃に、エーゲ海のテラ島で大爆発が起き、島の三分の一が吹き飛び、エーゲ海、地中海が大打撃を受け、それまで支配的であったクレタ島を中心とした母権制社会が急速に衰退し、父権制社会が勃興していった。女神達はその輝きを失い、男神たちが支配的になり出したのである。「パリスの審判」が原因となったトロイ戦争はそういう状況の下で起きたのである。

それでは黄金のリングの原神話はいかなるシナリオであったのか。母権制社会では、一族を束ねる女家長は、月女神一族の化身の巫女で、面倒な雑務を信頼できる男性を年限つきの聖王として迎え代行させていたのである。しかし、聖王は統治期間を終えると息子の後継者（タニトス——実の息子でなくともよい）に、その職位を譲り渡し、自らは生贄としてわが身を Hera に捧げなければならなかった。Hero という言葉は Hera に捧げられた生贄ということで、それが「英雄」の本来の意味であった。Hera とその化身の女家長は聖王に対して十分な敬意を払い、遺骸を大地の子宮の形をした墓に埋葬し、その靈魂を蛇の守る西方の「リングの楽園」に旅立たせていたのである。「黄金のリング」の神話は、Hera が三相一体の「Hebe → Hera → Hecate」の三柱の女神の姿で聖王の前に現れ、楽園へのパスポートとして旅立つ前にリ

ングを渡す儀式であった。よく画かれる図柄はパリスが黄金のリングを女神に与えている場面だが、原神話は逆で三相一体の Hera の女神が聖王にリングを与える場面であったのだ。

現代の私たちは、「墓」の意味をすでに忘れてしまったが、「墓」のギリシア語は *tumbos*、ラテン語は *tumulus* で、共に「膨れる」ということであった。それが英単語の *tomb* の語源である。*tomb* は *womb* の「子宮」と言語的に関連していたのだ。古代の巨石墳墓や塚は死者を再生させる子宮で、墓道は子宮への腔を意味し、子宮を大型化した設計であった。

このように『旧約聖書』の Adam と Eve と蛇とリングの神話にしても、また「パリスの審判」の神話にしても、全く新しく創り出されたものではなく、以前にあった神話を作り変えたものにとらえた方が無理なく自然である。

5. 月女神の恩寵「Logos、経血、母乳」

月女神は自らの経血で誕生させた被造物の全てに、今度は「母の乳（ギリシア語の *gala*）」の栄養を与えなければならない。それが Milky Way である。日本の広告コピーに「latte は milk で latte になる」（明治乳業）があったが、「牛乳」を意味するイタリア語の *latte* は、月女神 Lat の母乳から派生したもので、月女神は白い雌牛に譬えられてきた。その母乳の流れが Galaxy で、英単語の Milky Way である。日本の呼称は、銀河、天の川であるが、これでは月女神の「母乳」の意味が伝わらない。エーゲ海の Aphrodite、エジプトの Hathor、フェニキアの Astarte 等を月女神で呼ぶ時は、「乳を与える女神」の *Galatea* と呼んだ。この *Galatea* の白い雌牛を崇める信仰は、インド・ヨーロッパ言語文化圏に広がり、女神たちは直接、間接に月女神であった。例えば、イオニア人の先祖神の月女神 Io（イオ）は、Hera の添え名で、その娘神が「白い雌牛」の Europa で、今日の Europe の語源である。また、月女神 Lat にはエーゲ海、地中海を中心に、Lato、Leto、Lada、Leda、Latona と多くの呼称があり、「母の乳」の *latte* を与え続けたのである。そして、この乳を与える母が「法」の *law* を司っていたのであり、*law* と *logos* の語源は同じであった。

ところで、牛乳には経血と似た性質がある。牛乳を

攪乱すると混沌としたカオスの状態になり、さらに攪乱すると凝固してバターになり、チーズになる。このことから創世神話の中には、「母なる大地」が白い雌牛の牛乳が凝固してできたと信じている地域もあった。例えば、雌牛を造物主の月女神の化身と信じているインドがそうである。インドでは月女神の Kali Ma から流れ出る液体を soma と呼んでいた。soma は「血の大海」であり、「乳の海」であった。自然の世界の被造物は、水、血液、母乳、蜂蜜、樹液といった栄養分を必要とする。その栄養分は月女神からの贈物の soma である。月はその栄養分を貯蔵する容器であり、杯であった。この信仰がインド・ヨーロッパ言語文化圏に広がり、「母なる大地」の山々は月女神の山であり、その「月山」の乳房、子宮から自然の世界に必要な栄養分が流れ出て河になるのだと信じていた。

例えば、エジプトでは、Galaxy を「空のナイル河」と呼び、現実の「母なるナイル河」の水源の山を Ruwezori の「月山」と呼んでいた。その「月山」はエチオピアの遥かなたにあつた。ナイル河の Nile のヘブライ語は Gihon で、これは Gehenna、Genna で、「母なる大地」の Ge、Gaea を意味していた。月女神としての「月山」は、女体であり、白い雌牛であり、そこには樂園があり、乳房があり、子宮があると信じていた。エジプトの Pharaoh の玉座は、月女神の膝を意味し、そこに座ることにより、ひととき月女神と一つ（両性具有）になることができた。同じように Pharaoh のピラミッドは、月女神の山を人工的に造った「月山」と考えることもでき、「母なる大地」の子宮の中で月女神と聖なる結婚をし再生を祈願する墓の神殿であった。ピラミッド内部の象徴的な色彩は経血の色であった。

美しく聳える月女神の山、「宇宙の太母」の Chomo-Lung-Ma に対して、近代登山家はなぜ征服しようとした動機づけられたのであろうか。深層心理は「征服」ではなく、「宇宙の太母」との死を賭けた脱我・忘我の結合（両性具有）ではなかったのか。Chomo-Lung-Ma を、1953 年に登頂したエヴェレスト（Sir George Everest, 1790-1866）の名に因んで、に変えてしまったが、チベットの人たちにとっては「宇宙の太母」に対する冒瀆であったはずだ。エヴェレストはすでに死者の名である。しかし、Chomo-

Lung-Ma は「宇宙の太母」であり、永遠に女神の恩寵を与え続ける偉大な存在であるからだ。Chomo-Lung-Ma に並んで「滋養溢れる大きな乳房」の Annapuruna、そして聖なる女神の河の Ganga (Ganges) の月女神の山 Nand Devi が聳えている。これらの山々は、「天国の山々」を意味する Himalaya と崇められ、ドイツ語の Himmel (天国) と同族語である。ヒンズー教の Kali Ma の娘神 Parvati は Himalaya の娘と言われていた。

一般に、インド・ヨーロッパ言語文化圏では、男神たちは、オリンポス山を含め、月母神、「宇宙の太母」の山に抱かれ、強い絆（両性具有）で結ばれることによって、文化、文明の根源の力を充電することができたのである。

交接と出産が結びつき、女性たちが「新月→満月→旧月」、「創造→維持→破壊」、「処女→母親→老婆」、「母と父と子」の三相一体から、「父と母と子」の三相一体、そして、「父と子と聖霊」の三相一体の父権制社会へのシナリオを書き、宗教と政治の「まつりごと」を手に入れ、さらに男神の「創造の言葉」logos と「神の言葉の化肉」を手に入れたかに見えた。しかし、子宮から流れ出る経血、乳房から流れ出る母乳を有していない限り、月母神による宇宙原理、大地母神による自然原理、母親による女性原理を認めないわけにはいかなかった。男性が2つの乳首を持っていても、それは単なる飾りでしかないし、男根を去勢し、子を生み出す真似ごとをしても、現実には意味のないことであった。経血と母乳が月母神、大地母神、母親の「母性」の最大の属性である限り、男神と男性の安寧は愛 (Eros) の絆の両性具有にしか救いの方法はなかった。

6. 語源にみる女神と女性が輝いていた時代

「創造の言葉」logos と「創造物の根源」の経血と「栄養源の根源」の母乳は set であって、分離することは不自然なことであった。この logos、経血、母乳は、宇宙原理、自然原理、女性原理を支える母性力の三点 set であった。この問題を次に語源から思索してみたい。

インド・ヨーロッパ言語文化圏に見る、ma、mah、man、mana、manas、manos、men、mene、met、meter、mater といった ma、me を含んだ単語は、月

女神の「創造の言葉」の logos、Om から派生したものである。

そもそも、今日、man は「男」を意味しているが、これは「女」を意味していたのだ。man は万物創造の月女神であり、祖霊の manes の母であった。サンスクリットの man も、「真言」の Mantra に見るように、月女神と叡智を意味していた。ma、me を語源にして派生した現在の英単語を見ると、「母親」と「物質（創造物）」と「叡智」「測定」に関するものが多い。

ma という基本音節は、インド・ヨーロッパ言語文化圏でも、「母親」と「女神」を意味している。mother、maternal (母の)、matron (既婚婦人)、matrix (母体)、menses (月経)、menage/manage (家庭、家事、家政、世帯、管理)。次に、「創造物の根源」に関してみると、matter (物質)、material (材料)、mud (泥) 等がある。「女神」「女神の叡智」に関しては、moon、Mut (母神)、Maat (娘神)、Demeter、Muses、Mnemosyne (記憶の女神)、Menrva (Minerva)、omen (前兆、月、啓示)、amen (アーメン、再生の月)、mind、mentality 等ある。「学問」「測定」に関しては、mathematics (数学)、matrix (行列)、metrics (計量学)、mensuration (測定法)、meter (配分)、geometry (幾何学)、mete (配分)、trigonometry (三角法)、hydrometry (液量測定)、meter (計器) 等がある。これら語源から派生した単語を見ると、自然と共に生きていた時代の女性たちは、宇宙原理、自然原理、女性原理に従った「創造→維持→破壊」の三相一体の周期、循環に生まれながらにして熟知していたことがよく分かる。

女性は経血 (menstrual blood) の周期と月の朔望の周期、潮の干満の周期が密接に関係していることから、天文に関する研究を文化、文明の基礎学問とみなしていた。天文に関する「母親の知恵」が学問の mathesis であり、「天文の学問のある母親たち」を Mathematici と呼んでいた。今日の「数学」を意味する mathematics の語源である。特に、月女神に仕える巫女はその能力に長じた sybils で、女神 Cybele と同語源である。

今日、astrology は「占星術」で、astronomy が「天文学」である。しかし、astrology は astro (星) と logy (logos) との合成で、そもそも宇宙原理を探

究する天文学を意味していた。従って、astrology は「占星術」というより「天文学」であったのだ。今日言うところの単なる星占いで月女神の化身の巫女になれたわけではない。「母親の知恵」が「創造→維持→破壊」の周期の繰り返しから、「新月→満月→旧月」、「乙女→母親→老婆」、「白→赤→黒」、「天界→地上→冥界」、「未来→現在→過去」といった三相一体の意味を読みとり、三相一体のシンボルを表現してくれたのである。

その astro の語源は月女神 Astarte である。Astarte は夜空にあって、「創造→維持→破壊」の周期を繰り返す不滅の統治者で、創造した生命を破壊しては、また新しい生命を創造する。そして、夜空に輝く星は、Astarte が死者の靈魂に身体 (star) を与えたものである。それで、「星の女王」の Astroarch と崇められていた。太陽神も一年の中で最も弱い光に落ち込む冬至に、月女神 Astarte に再生を祈願しなければならなかったのだ。

1年12ヶ月の太陽暦に移行してからも、農業中心の社会にあってからも、太陰暦、月経暦 (menstrual calendar) が使われ、祭事もこの暦に従っていた。1年は「28日×13ヶ月+1日=365日」である。ひと月は7日単位の4週からなる28日で、4つの安息日を入れて区切りをつけていた。この安息日は『聖書』にも取り入れなければならなかった。また一年の周期の中に太陽の動きをとらえた春分、夏至、秋分、冬至のポイント、そして星の間の太陽の通り道の黄道を見出し、天文学を体系化したのである。

女性たちは、月女神の助けを借りて天文に関する学問の土台を作り、文化、文明の創造を支配していたのである。ざっとその能力をあげてみると、音楽の旋律、昼と夜、年、季節、月、日、インチといった計測単位、さらに文化、文明を司る神々を創り出したのである。その結果、女性たちは、農業、建築、織物、陶芸、文芸、詩、音楽、絵画、学問に関する生活文化、生活技術を発達させたのである。

7. オリンポス神話の創作プロセスと作為

母権制社会から父権制社会への移行過程で、月女神の一族を男神たちの支配下におくために、神話作者たちが不自然に作為したことは明らかである。何度も手を加えているうちに、実にゴタゴタした神話になり、

収集がつかなくなってしまうからである。そこで、グレーヴスの『ギリシア神話』とウォーカーの『女性の神話・伝承事典』を参考にして、オリンポス神話の不自然な作為を指摘しておきたい。まずはその前に、オリンポスの標準的な創世神話をざっと整理しておく。

Mother Earth (大地母神: 一般的には Gaea) がカオスの中から息子の Uranus を産んだ。その Uranus が「天 (sky)」の神となり、Mother Earth (Gaea) の「大地」の女神と交わり、時の神の息子 Kronos をもうけた。息子 Kronos は Uranus を嫌う Mother Earth (Gaea) に組して、父 Uranus の男根を鎌で切り落とし、海に投げ、廃位に追い込み、自分が父の地位に就いた。切り落とされた Uranus の男根が海と交わり、愛と美の女神 Aphrodite が誕生し、Uranus の去勢により血が大地に流れ落ち、復讐の三柱の女神 Erinys が生まれた。Kronos は姉の Rhea を妻にし、Hestia、Demeter、Hera、Hades、Poseidon、Zeus をもうけた。しかし、Kronos はわが子によって支配権を奪われるとの予言を聞き、生まれた順に呑み込んだのである。それを見ていた Rhea は、最後に残った Zeus をクレタ島に隠し、そこで育てることにした。Zeus が成長し、Kronos に立ち向かい、呑み込んだ子らを吐き出させ、Kronos を廃位させ、自分がその地位に就いた。Zeus は Hera を正妻にし、二柱の間に鍛冶の神 Hephaistos と軍神 Ares をもうけた。Zeus は主神として電光と雷霆を武器に「天界」を支配し、Poseidon には三叉の戟を与え「海洋」を、Hades には隠れ帽子を与え「冥界」を治めさせた。女神 Hestia には「炉」を守る仕事を、女神 Demeter には農耕を司る仕事を与えた。Zeus は他に「思慮」の女神 Metis を呑み込み、頭から「戦争」と「叡智」の女神 Athene を産み、月女神 Leto (Lat と同じ) と交わり、双子の太陽神 Apollon と月と森と狩猟の女神 Artemis をもうけた。Zeus は多くの女神、ニンフ、女性と交わり、数えきれないほどの神々をもうけた。例えば、Zeus は Kadmos の娘 Semele との間に後に祭神となる Dionysus (Bacchus) をもうけるが、Semel が Zeus の雷霆で焼死してしまう悲運にあい、Zeus は自らの太腿の中で、月足らずの赤子の四ヶ月を預り、誕生させた。しかし、そのことを嫌った Hera の嫉妬を避けるために Hermes に命じてニュー

サのニンフに育てさせたのである。ここで、Hermes は男根ではなく Zeus が先住民族の Atlas (巨人神) の娘の Maia に産ませた美青年の神ということになっている。また Zeus は記憶の女神 Mnemosyne との間に九柱の Musai をもうけ、文芸・芸術・学問を担当させ Apollon の指揮下においた。Zeus は自らの万能の力をつけるために、女神、ニンフ、女性たちと愛を重ね、もうけた子たちを自分の配下においた。

それでは、以上の標準的な創世神話のどこが不自然な作為なのかを指摘したい。オリンポス神話の作者たちが先住民族の創世神話の月女神について、十分熟知していたと思われるが、それには一切触れずに、Mother Earth の Gaea から始めている。Gaea は先住民族のプレヘレネスの母権制社会の大地母神であるが、月女神に触れていないのは不自然である。それでは、Uranus の出自はどうであったのか。北部ギリシアに侵入してきたヘレネスのアーリア系 (インド) の民族は、農牧神 Varuna を崇めていた。その神のギリシア名が Uranus である。Uranus は女神 Ur-ana を男性名詞にしたもので、その意味では、Varuna は両性具有神であった。グレーヴスは、プレヘレネスの Gaea からヘレネスの Uranus が生まれ、Gaea と Uranus が結ばれる前に、プレヘレネスとヘレネスの間に、つまり、「母権制社会 vs. 父権制社会」「女家長制 vs. 家父長制」「地 vs. 天」の激しい衝突があったことを指摘している。ヘレネスの神話作者が先住民族の大地母神から Uranus が生まれ、また結ばれたという神話を創って調整を図ったのである。しかし、母権制社会では、聖王はその地位の統治期間を終えると後継者 (タニトス) の息子に譲り渡さなければならなかった。そこで、初代の Uranus、二代目の Kronos まではそれに従ったが、Zeus からは策をめぐらしその制度を廃止したのである。Zeus は十分に時間をかけ、Hermes と同じように、多くの女神、ニンフ、女性たちと愛を重ね、支配能力をつけ、子をもうけ、その上でヘレネスの父権制社会、家父長制の主神の地位に就いたのである。しかし、プレヘレネスの女神 Rhea から一夫一婦婚を禁じられ (集団婚、群婚の長い慣習が続いていた)、女神 Hera を正妻に迎えたものの、Hera の嫉妬に悩まされ、つまり、各地で何度も母権制社会、女家長制からの執拗な抵抗を受けたのである。

ところで、現在のエーゲ海、地中海の研究で話題になっていることは、紀元前 1700 年頃と 1500 年頃にテラ (Thera) 島で起きた大爆発である。テラ島はこの大爆発で島の三分の一を失い、この影響で母権制社会、女家長制が急速に衰退し、代わって父権制社会、家父長制が抬頭したという仮説である。大爆発以前は一族を束ねる家父長たちは、聖王として先祖神の Zeus、Poseidon、Ares、Hephaistos の称号を名乗っていても統治期間を終えると生贄にされていたのだが、この頃からその統治期間を終えても生贄にならずにすむようになったのである。

Kronos が姉の Rhea との間に次々と Hestia、Demeter、Hera、Hades、Poseidon、Zeus をもうけたことになっているが、この神々の創出過程はあまりに性急で粗雑である。特に、女神はプレヘレネス時代のいずれも由緒ある出自を持った偉大な神々であったからである。同じことは Aphrodite、Athene、Artemis についても言える。

Hestia は炉の女神で、母権制社会の宗教行事の中心の女神であった。Hestia は公の儀式の神殿の炉、住居の中心の炉の女神で、ラテン語の Vesta である。すべての宗教行事の祈祷、供儀は Hestia で始まって Hestia で終わっていた。「炉」は「大地のへそ」と言われ、ドイツ語の Erde (大地) と Herde (炉)、英語の earth (大地) と hearth (炉) は同じ言葉であった。

Rhea はエーゲ海の「宇宙の母」と崇められ、母権制社会の中心のクレタ島では、「法を制定するディクテ山の母神」、「エーゲ海文明の創設者」、「創造→維持→破壊」の三相一体の女神であった。この女神はロシアでは Rha、ケルトでは Rhiannon、ラティウムでは Rhea Shirvia (森の Rhea) と呼ばれ、インドの Kali Ma と同じく、「創造→維持→破壊」の破壊させる女神、死者の相が強調されていた。産んだ子どもたちを貪り食う母親とは、「時」の女神ということである。「時」は生を与えると同時に、死に向かわせているのだ。すべての被造物は「時」に貪り食べられているということである。

Hera は Rhea と同じで、男神よりも遥かに前から存在した万神の母親である。Rhea の娘となっているが、He Era で Rhea と同じ「大地」のことである。Hera は「Hebe → Hera → Hecate」の三相一体で、

「新月→満月→旧月」「処女→母親→老婆」「春→夏→秋」として顕現する女神であった。Hera と語源の同じ女神は広域にわたり、バビロニアでは Erua、アイルランドでは Eire、Eriu で、みな西方に「リンゴの楽園」を有していた。また、Europa は Hera の化身であり、サクソンには「Hera の山」Heresburg があった。生贄はまず、Hera に捧げられていた (Hero) ことを考えても、Hera は Zeus に従うほど弱い女神ではなかった。

Demeter はオリンポス神話では農耕の女神とされているが、母権制社会では、女陰を通じての「創造→維持→破壊」「処女 (Kore) →母親 (Demeter) →老婆 (Persephone)」の三相一体の女神であった。De はギリシア語の Delta の三角形で「女陰」を表わしていた。Delta はサンスクリット dwr、ケルト語 duir、ヘブライ語 daletth で、誕生、死、性的楽園の入り口を意味した。meter は「母親」の意味である。Demeter の神殿は子宮を形どった丸天井式納骨堂で、出入り口は三角形で、通路は腔状、堂は丸天井であった。色調は経血の色で、「三角形→出入り口→女陰」は Demeter を象徴していた。農耕の女神として強調されたのは、母神 Demeter が秋に実らせた種 (Persephone) を、春に芽 (Kore) を出させることからの連想である。

Athene はオリンポス神話では、Zeus の頭から生まれ、「戦い」と「叡智」を司る女神で、Athene の名をとった都市国家の守護神としてパルテノン神殿に祀られている。しかし、そもそもの出自は、北アフリカのリビアのトリトニス湖の生まれで、「叡智」の女神 Metis、Medusa、Anath、Ath-enna で、ギリシア名が Athene であった。Athene は広い地域で「天界の女王」「万神の女王」「力強い生命の女神」「汚れ無き乙女」「純潔なる叡智の女神」として崇められ、「破壊者としての Athene」としては、生贄にした多くの男たちの男根を神盾に吊し畏れられていた。それは、敵を石に変える Medusa の頭を神盾の中央にデザインしていたからである。

Artemis はオリンポス神話では、Zeus と Leto (Lat) の Apollon との双子神として生まれ、月と森と狩猟の女神の役割を与えられている。しかし、母権制社会では、アマゾン女人種の月女神で、ラテン語の Diana にあたる。インドでは Saranyu と同じで、「生

物の母親』として崇められた。そのために、エフェソスの Artemis 像は胸いっぱい乳房をつけていた。一方、「破壊」相では「屠殺者」の Artemis と呼ばれた (スパルタ)。さらに前の新石器時代には、Artemis 神殿に男性たちを生贄にして、頭を十字架にかけた。後に男性に代わり雄牛を生贄にするようになり、「雄牛屠殺神」の Tauropolos と呼ばれた。

以上は、ざっとオリンポス以前のヘレネスの女神たちの出自と性格について見てきたが、母権制社会の力ある女神たちを、神話の書き換えだけで、簡単に支配できたわけではない。その苦労話はホメロスの『イリアス』と『オデッセイア』に、またアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスのギリシア悲劇の中に十分に表現されている。これら文芸・芸術は、母権制社会から父権制社会へ、女家長制から家父長制へ、月女神一族の神話から Zeus 一族の神話へ、価値観・ライフスタイルを転換させる上手な文化装置であったと言えよう。それでは、次にオリンポスを中心にした、男神たちの出自についてざっと見ておきたい。

オリンポス神話では Zeus の父の Kronos は非情な鎌を手にした「時の神」とされているが、Kronos は一羽の鳥を従えていた。鳥は聖王が生贄にされるとその霊を宿す、神託を告げる役割を担っていた。ローマ神話では Kronos は鎌を持つ農耕の神 Saturnus (英語 Saturn) で呼ばれた。次の Zeus は Kronos と Rhea の子であるが、もともと Zeus の出自はそんなに立派なものではなかった。グレーヴスによれば、Zeus はもとは蛇身で、蛇が鼠を駆除することから、倉庫の守り神であった。また、クレタ島の Zeus は薄汚い郭公の姿に身をやつしていたと言われている。クレタ島へ亡命してきたヘレネスたちが王宮警護にあたっていたが、紀元前 1700 年頃と 1400 年頃 (テラ島の大爆発にほぼ対応) の二度にわたり、郭公の姿のついた Hera の笏を借りて叛乱を加え、クノッソス宮殿を乗っ取ったのである。Zeus はクレタ島を支配するようになってから、女神、ニンフ、女性たちと愛の絆を結びながら、Hermes のように立派な主神としての支配能力をつけていったのである。語源的にはサンスクリットの Dyaus pitar (天界の父) をギリシア名にしたもので、ラテン語で Jupiter、Jove、ユダヤでは Jehovah と呼ばれている。しかし、Zeus が主神になるまでには、Zeus-Sabazius、Zeus-Zagreus、Zeus-

Sabaoth として、多くの聖王たちが Zeus の名において生贄として Hera に捧げられたのである。

Apollon は、Hermes と並んで Zeus の頼りになる太陽神で、Delphi の予言を司り、Muses の指揮者で音楽・文芸・芸術を司り、また、医術、弓術といったあらゆる文化、文明を司る神であった。それでは、このように立派な男神に成長する前の出自はいかなるものであったのか。グレーヴスによれば、古い称号の中に Apollon Smintheus (鼠のアポローン) があり、鼠が病気と治療に関連していることから医術と予言を司るようになった。また、リンゴを食べた聖王の精霊であったことから、「リンゴ」の abol から Apollon になったとも考えられた。しかし、またキケロの論文『神々の性質について』では、月女神 Leto (Lat) の息子、Hephaistos の息子、音楽と踊りの Korybas たちの父、アルカディアの法律の父の 4 つの系列が語られていたという。

一方、ウォーカーの事典によれば、Apollon の語源は、エジプトの靈魂導師、ミイラ作りの Anubis で、頭が狼、犬、ジャッカル半獣神である。Anubis は Up-Uat、Apol で、Apollon の語源である。アリストテレスの学園の Lyceum が Apollon の神殿にあったことは良く知られている。Lyceum からフランス語の「学校」の lycée が派生しているが、Lyceum はギリシア語では Lukeion で、lukos は「狼」の wolf を意味していた。つまり、Apollon 神殿は「狼神殿」であったのだ。月女神の Artemis は、雄狼の Apollon を Zeus の期待する立派な男神にするために、自ら雌狼に変身し、愛の絆でしっかり結び、Artemis の超能力を恩寵として授けたのだ。オリンポス神話ではもっとスマートに、Zeus と Leto (Lat) の間に双子として、Apollon と Artemis が生まれたという作為を加えたのである。

Anubis のような雄狼の半獣神はインド・ヨーロッパ言語文化圏に広く見られる。val-ulf (デンマーク語)、vaira-ulf (ゴート語)、wargus (ノルマン語)、włkoslak (セルビア語)、vlkodlak (スロヴェキア語)、wawkalak (ロシア語)、vrykolaki (ギリシア語)、varcolaci (ルーマニア語)、loup-garu (フランス語)、lupo manaro (イタリア語)、Währ-Wölffe (ドイツ語)、volkhvi (スラブ語)。

Dionysus の出自は、Zeus と Semele の息子よりも

遙かに古い。Dionysus は葡萄酒と祭りの Bacchus とも呼ばれているように、その起源は葡萄酒の伝播と一緒にであった。葡萄は黒海沿岸の野生から始まり、パレスティナ→リビア→クレタ→ペルシア→インドへ、また青銅器時代のブリテンへと伝播した。神祭りの脱我、忘我を演出する植物の麻酔剤に代わり、Bacchus の葡萄酒が勝利したのである。バハオーフェンは、Dionysus を父権制社会への移行期の神として位置づけているが、明らかに女性たちを母権制社会へ連れ戻す神であった。しかも、Dionysus は神祭りのたびに生贄にされる神であった。暦が三期の春、夏、冬に分かれていた時代、Dionysus は春に獅子に、夏に雄牛か山羊か雄鹿に、冬に蛇に変身した姿で現れたのである。この頭が獅子、胴体が山羊、尾が蛇の象徴物が Chimera であるが、今日、現代人はその本来の意味を忘れ、chimerical を「空想の」「荒唐無稽な」「妄想的な」の意味に使っている。母権制社会から父権制社会に移行する兆候が現れると、Dionysus は女性たちを原始原初の森に連れ出し、そこで神憑りの狂乱の祭りを催したのである。男神たちは父権制社会への移行に抵抗するこの Dionysus をいかに押え込むか策をめぐらした。ここからの現代的解釈は、ニーチェの『悲劇の誕生』に詳しい。Athene の Medusa も、また Apollon も Dionysus に齒が立たなかったのだ。ついに和議を申し出、Dionysus を崇める祭りを催し、そこから「ギリシア悲劇」が誕生したのである。しかし、Dionysus 祭、そこで演じられた悲劇は、母権制社会から父権制社会へ、価値観・ライフスタイルの転換を図る上手な文化装置であったと言える。

Poseidon、Hades、Hephaistos、Ares の神々の出自と性格はどうであったのか。オリンポス神殿では、Zeus、Poseidon、Hades は三人兄弟ということで、ギャンブルで Zeus は「天界」、Poseidon は「海」、Hades は「地下」の支配権を決めたことになっている。Zeus は「大地」の Hera と結ばれることで主神としての支配能力をつけ、同様に Poseidon は海の支配者の月女神 Amphitrite と、Hades は冥界の支配者の Persephone と結ばれて支配能力をつけたのである。ヘレネスの中のイオニア人は先祖神として Hades を、アイオリス人は Poseidon を、アカイア人は Zeus をそれぞれ立てて、ギリシアに侵入し、先住民族の女神たちと結ばれることで、その支配能力をつ

けたのである。しかし、Hera、Amphitrite、Persephone の女神たちが妻になることを拒みつつ結ばれたということで、先住民族がヘレネスの種族に強く抵抗していたのである。Poseidon の名は母神の Potidan (母神の都市 Potidaea) からの借りもののようで、その出自は定かではない。Hades の添え名はギリシア語で Aidoneus で、「隠れたる神」で、大地の子宮の中に宿る男根神であった。このように由緒ある出自でもない Poseidon、Hades も Zeus 同様に立派な男神に成長するために、多くの女神、ニンフ、女性と愛の絆を結ぼうとするが、いつも強い抵抗を受けていた。もっとも、女神との性的結合による男神への成長は、広くインド・ヨーロッパ言語文化圏に共通したことであった。Ares は軍神として 12 神の中に入っているが、もともとは神というより戦いの際のまじないの呪法から生まれた神であると考えられている。Ares に犬が捧げられていたが、犬の犠牲がまじないの呪法であった。

8. 月女神の恩寵 (Kháris) の想起・文芸復興

キリスト教は、「創造→維持→破壊」の三相一体の循環原理を公には否定し、「父と子と聖霊」の三相一体の原理に変えてしまった。その真意は母性の恩寵の否定で、道徳の根本原理は性衝動の抑圧にあり、性的結合は生得の悪であるというものであった。しかし、この原理はあまりにも不自然である。男神、男性が母性を支える logos、経血、母乳の三要素の中から、logos だけを取り出しても、経血、母乳とセットでなければ「言葉 (logos) の化肉」は起きない。つまり、実体が顕現しない。このことをよく認識していたオリンポス神話の男神、男性は Hermes だけでなく自らも女神、ニンフ、女性の恩寵を必要としたのである。本論文の最初の問いかけは「何ゆえに、Hermes と Aphrodite の神々が結合、合体し、いつまでも愛の絆で結ばれていなければならないのか」と言うことである。

この問いかけに対して、Hermes 自身が Aphrodite の恩寵を受けて、子をもうける「聖なる創造の精子的言葉 (logos spermatikos)」を手に入れたとしても、さらなる Aphrodite からの性的恩寵が続かなければ、つまり、「創造物の根源 (menstrual blood)」「栄養物の根源 (milk)」の恩寵が無ければ、「言葉の化肉」

が起きないことを知っていたからである。ところが、キリスト教は女神の恩寵を否定し、造物主を男神にし、「太初に言 (logos) あり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り」と宣言してしまった。キリスト教は、この前提から始まったために、多くの不自然な矛盾を抱えることになった。不自然を神の奇跡としても、明らかに時代錯誤の矛盾だと思われることも少なくない。不自然は永遠に続くものではない。

人類の歴史を振り返れば、文明は科学の logos に支えられて大きな輝かしい進歩を遂げてきた。しかし、他方、現代人は、「母なる宇宙」の不自然、「母なる大地」の不自然、そして、人間自身の不自然があまりにも大きくなり、自然への回帰が最重要課題であることに気づいている。この自然への回帰は、月女神の恩寵への回帰でなければならない。実は、現代人の Yoga への関心の高まりは、月女神の恩寵への回帰の現れである。サンスクリットの yoga は yoni (女陰) と lingam (男根) の「結合・合体・絆」を意味している。これは、androgyny が gyne と andro の結合であることと同じである。その Yoga のモデルは、原始ヒンズー教 (タントラ教) の Kali Ma と Shiva の性的結合による恩寵である。これも、Aphrodite と Hermes の性的結合モデルの恩寵と同じである。従って、Yoga と androgyny の本質は単なる楽しみや遊びではなく、「宇宙・自然・女性」を貫いている母性の中に入り、「ひとつ (uni)」になることである。いや、母なる宇宙 (universe) の胎内 (uni と yoni は同語源) のマクロコスモスの中にミクロコスモスとして入ることである。そして、月女神の女性原理に従うことである。このように Hermaphrodite と androgyny の謎解きをしてみると、今日、医学の分野で使われている「性分化・発達障害」の意味の「両性具有」という日本語の訳語は適切とは言えないのかも知れない。

従ってこの Kali Ma の Yoga の恩寵は、Aphrodite、そして月女神一族の恩寵と同じなのである。「創造→維持→破壊」の月女神が輝いていた時代、女神の化身としての巫女が、Hermes の場合と同じように、神殿に祈願に来る男性に性的至福の恩寵を授けていたのだ。その恩寵がギリシア語の kháris、ラテン語の caritas である。そして、それが charisma なのである。バビロンでも Kali Ma にあたる Ishtar の化身の巫女が、神殿で恩寵を授けていた。映画や小説

で話題になった『ダヴィンチ・コード』の Magdalene の Maria も、同じ恩寵を授けていた。そして、キリスト自身もその Magdalene (神殿) の Maria を大切にしたのである。そもそも、キリストだけでなく、月女神の時代から神殿の巫女から生まれた子は、「言葉 (logos) の化肉 (顕現)」の「救世主」と言われ、神の子として崇められていたのである。

Ishtar の化身の巫女たちは、Ishtar を HAR と呼んでいた。HAR はペルシア語の Houri、バビロンの Harine、ギリシアの Hora である。この巫女たちが、ペルシアでは天女の houri、ギリシアでは horae と呼ばれ、夜の時刻を守るために「時 (Time) の踊り」を司っていた。それは、宇宙の中心、神殿の中心の Hestia の「炉」を回る踊りであった。HAR の巫女たちの「時間を司る女性たち (Ladies of the Hour)」が、「時間の踊り (The Dance of the Hour)」の儀式を始めたのである。そして、「時間」を意味する hour の語源になったのである。今日でもヘブライ人の伝統的なフォーク・ダンスは、この「時間の踊り」に由来して hora と呼ばれている。また、HAR を語源にした言葉に、「女性の神殿」の harem がある。

「性的恩寵」を意味するギリシア語の kháris は、先史時代には cale、kale とも発音され、サンスクリットの kali と同じであったと言われている。この kháris、caritas から、「美と優雅」の女神たちが生まれ、後にその中から三柱の女神を選び三美神として崇めたのである。「若さ」の Thaleia、「喜び」の Euphrosyne、「輝き」の Aglaia の三美神 (Charis たち、Three Graces) である。三美神はヌード芸術でよく表現され、また Aphrodite の随伴者になった。

Ishtar の別称の HAR に対応するギリシア語の Hora は「季節と秩序」の女神になり、Horae (ホーラたち) は「秩序」の Eunomia、「正義」の Dike、「平和」の Eirene の三柱の女神になった。また、Horae は植物や花を司る「自然の季節」の女神となった。

Aphrodite (Venus)、Hora、Charis (三美神) は、フィレンツェ・ルネサンス期に再び強い関心と呼び、ボッテチェリの「ヴィーナスの誕生」「春」に表現されている。この溢れるばかりの「美と優雅」が両性の愛の絆、性的結合のもたらす女神たちの恩寵の輝きであった。ところが、キリスト教は身体的結合を抜きに

した、精神的恩寵だけの charity にし、「慈善」にしてしまった。そして、絵画の中の女性は身体の輝きを失った。その輝きを取り戻したのがルネサンスである。キリスト教は、「性衝動、性的結合は生得の悪である」とし、自然な性的結合の kháris, yoga をすっかり損ね、そのことにより現実の性的結合の考え方も実際も不自然にし、逆に歪め、異常な方向に向かわせてしまった。

その異常な事例の一つに asceticism の「禁欲主義」がある。自然な性的結合の恩寵を否定し、その欲望に駆られる自己を否定し、自らに難行苦行を課す禁欲主義生活を勧めたのである。なぜ母性と「ひとつ」になる官能的恩寵を徹底的に排除することになったのか。

母権制社会、月女神の一族の神々が輝いていた時代に、男性たちの最大課題は、なぜ女性が子を産むことができ、男性にはそれができないのかということであった。男性が子を産むことは不可能なことなのか。この問に対する答え探しは、母権制社会から父権制社会への移行過程から始まり、オリンポス神話では、主神 Zeus は頭から Athene を産み、太腿から Dionysus を産むという文字通り神技を使ったわけだが、キリスト教はこの問題を asceticism として徹底的に追及したのである。もちろん、他の宗教にもそれはあったが、例えば、インドのヒンズー教の難行苦行がそうであった。この難行苦行が普通にはありえない奇跡をもたらすと信じたのである。これがそもそもの asceticism の始まりであった。その後、この asceticism は、修道院の「祈り働く」修徳主義になり、宗教改革を経たキリスト教は物的禁欲主義へと変遷することになった。

「創造→維持→破壊」の循環の三相一体の「死と再生」原理を信じていた時代、女性は母から娘、娘から孫娘へと自分自身の生命が永遠に続く「無限の生命 (zoe)」を実感できた。他方、男性は一度限りの「有限の生命 (bios)」でしかないコンプレックスを抱いていた。そのために、男性は女性になろうとして、擬媿 (convade)、女装 (transvestism) し、さらに、去勢 (castration) という不自然なことをしたのである。Kronos の去勢と Aphrodite の誕生も、また Zeus の太腿の話も去勢を意味していた。去勢することによって子を産みたい。その強い願望が男神たちの

去勢による出産神話を創ったのである。これは、インド・ヨーロッパ言語文化圏だけでなく、世界中の神話に見ることができる。そして、仕舞には父神が去勢すれば母神の能力がつき、造物主になれるという創世神話に発展したのである。後に、去勢の儀式は子どもにも及び、割礼をし、経血のシンボルの塩でもみ、子をもうける力を授けたのである。

子を産むことこそが、「死と再生」の最も大切な神性である。「創造の言葉 (logos)」、「創造物の根源 (menstrual blood)」、「栄養物の根源 (milk)」は、女神・女性の聖なる本質的属性である。そこで、男性は女神、女性の力をつける努力をし、男神を去勢して出産神話、造物主神話を創ってみたが、現実の男性には出産の奇跡が起きるわけがなかった。また、キリスト教以前のギリシアで Hera の生贄になって巫女の女性たちに自らの血と肉を食してもらい、巫女から生まれなおそうとしても現実にはありえなかった (hero & cannibalism)。あり得るのは、「母と父と子」、「父と母と子」の三相一体の原理に従って、女神・女性と愛の絆を結び続けることである。その理想モデルが Hermaphrodite であった。芸術課題として、フィレンツェ・ルネサンスから、ロダン、ピカソの現代に続いている Aphrodite 讃歌である。

ところが、キリスト教は、「母と父と子」、「父と母と子」の三相一体の原理ではなく、「父と子と聖霊」の三相一体の原理に従い、聖体拝受 (Eucharist) の不死性のキリストの聖体のパン (肉) と葡萄酒 (血) による全質変化 (transubstantiation) のシナリオを示したのである。パンと葡萄酒を食し、飲み、不死性のイエスの肉体と血に変質するという信仰である。しかし、この全質変化は、男性にとっても、女性にとっても、生まれ出たからのシナリオとしてはよいけれども、生まれ出る前提の性衝動と性的結合を否定したのでは生まれるべき子も生まれてこない。現代の科学の時代にあっても、現代人の多くは「母と父と子」「父と母と子」の三相一体の原理に従い「子ども→孫→曾孫→……」と生命が続いていく素朴な人間観を支持している。

これはあまり知られていないことだが、出産が産婆 (助産婦) に長く依存していたために、婦人医学が立ち遅れ、卵子が発見されたのは 1827 年のことであった。カール・フォン・ベーア (Karl von Baer) が初

めて、人間の卵子 (ovum) を発見し、精子 (sperm) に比べ大きく、複雑であることを明らかにした。この発見で、ギリシア悲劇のアイスキュロス、そして聖アウグスティヌス、聖トマス・アクィナス等が主張してきた「母は、父の種 (seed) が育つ土壌 (soil) に過ぎない」という考え方が修正されることになった。卵子 (ovum) と精子 (sperm) の結合で初めて種子 (seed) が誕生する。それは、性衝動、性的結合の讃美があつてのことである。これを抑圧し、生得の悪と決めつけ、交接で生まれた子は不浄の子であるから洗礼を受けなければならないというのは、極めて不自然である。その意味で、現代人が古代母権制社会から学ぶべきことは、月女神の恩寵を想起し、その原点に立ち返ることである。フィレンツェ・ルネサンスに関連づければ、古代ギリシアに立ち返った文芸復興を、さらにそれ以前のインド・ヨーロッパ言語文化圏の祖語・祖宗教の先史時代の根源的宇宙観にまで立ち返って、原始原初の月女神の恩寵を想起し、宇宙原理、自然原理、女性原理を貫いている母性力を最大優先し、その文芸復興を図ることである。

付記

実践女子大学の講義は、90分授業で通年で28回である。この度、本論文で扱った課題の他に、どのような課題を授業で扱っているか最後に補足しておく。

1. 各民族の創世記の比較研究

『旧約聖書』をテキストに、ミケランジェロによるシスティナ礼拝堂の天井画を導入にし、造物主が男神であること、光と闇を分離した後で、太陽と月を創造していることなどを説明し、さらに、母権制の時代の各民族の創世神話の造物主は男神か女神か、その神はどのようにしてこの宇宙を創造したのか、質問をしながら講義を進めていく。

2. Dionysus 祭とギリシア悲劇

ギリシア悲劇は母権制社会から父権制社会への転換を図る巧みな芸術運動である。このような考え方が成り立つかを講義において検討する。

3. 不自然な愛の形

父権制社会への移行により、自然な愛の形がどのように歪められたか。rape, birth control, prostitution, sexism (女性差別)、adultery, asceticism (禁欲主義) 等の ideas を参考に検討する。

4. 婚姻制度の不自然

Aphrodite、Rhea が何ゆえに婚姻制度に反対したのか。婚姻制度が母系家族・母系相続から父系家族・父系相続への移行を早めたと言えるのではないか。marriage、motherhood (母性)、matrilineal inheritance (母系相続)、fatherhood (父性) など。

5. 『聖書』の秘密

モーゼ、キリスト以前の生贄と救世主について、Osiris, Dionysus, Adonis, Tammuz, Attis 等を例にとりあげ、キリスト教の聖餐式、洗礼 (baptism)、十字架 (cross)、処女降臨 (virgin birth)、復活 (re-birth) の儀式を比較検討する。

6. キリスト教に見る禁欲主義 (asceticism)

キリスト教は初め女性たちの宗教能力と官能能力を避けるために、禁欲主義を取り入れたが、やがて、高い精神生活の修道院における修得主義、そして宗教改革以降は職業労働尊重と物的禁欲主義へと変遷した。

7. 愛の勝利——Venus conquers Pan; Love conquers All.

文芸・芸術の永遠の課題を、Aphrodite (Venus)、Eros、Pan (半獣神) の表現の歴史をたどり、この課題が現在なお現代人の心の支えになっていることを検討する。

8. 『古事記』に見る根源的宇宙観

日本神話の創世記、神々の出産神話、特にイザナギノミコトの出産神話などを、母権制社会の神話と比較検討する。

以上の講義課題に関しても、いずれ論文にまとめて発表したいと思っている。

参考文献

- 1) Samuel P. Huntington (1993) "The Clash of Civilization?" *Foreign Affairs*, 72, 3: 22-49.
- 2) Samuel P. Huntington (1996) "The West Unique, Not Universal" *Foreign Affairs*, 75, 6: 28-46.
- 3) Samuel P. Huntington (1997) *The Clash of Civilization and the Remaking of World Order*. New York: Simon & Schuster: Touchstone.
- 4) 鈴木治雄編 編集松田義幸 (1999) 『現代「文明」の研究：普遍的価値の絆を求めて』東京：朝日ソノラマ。
- 5) Johann J. Bachofen (1861) *Das Mutterrecht*. Stuttgart: Verlag von Kraiss & Hoffmann.
- 6) J. J. バハオーフェン著、吉原達也、平田公夫訳 (1992/1993) 『母権制』(上・下)。東京：白水社。

- 7) J. J. バハオーフェン著, 岡道男, 川上倫逸監訳 (1993) 『母権制』(全三巻). 東京: みすず書房.
- 8) J. J. バハオーフェン著, 吉原達也訳 (2002) 『母権制序説』 東京: 筑摩書房.
- 9) Robert Graves (1955) *The Greek Myths*. I, II. Baltimore: Penguin Books.
- 10) R. グレーヴス著, 高杉一郎訳 (1962) 『ギリシア神話』(上・下). 東京: 紀伊国屋書店.
- 11) Barbara G. Walker (1983) *Women's Encyclopedia of Myths and Secrets*. New York: HarperCollins.
- 12) B. G. ウォーカー著, 山下圭一郎他訳 (1988) 『神話・伝承事典——失われた女神達の復権』 東京: 大修館書店.
- 13) 上山安敏著 (2001) 『神話と科学』 東京: 岩波書店.
- 14) エーリッヒ・フロム/ライナー・フンク編, 滝沢海南子, 渡辺憲正訳 (1997) 『愛と性と母権制』 東京: 新評論.
- 15) 高津春繁著 (1984) 『ギリシア・ローマ神話事典』 東京: 岩波書店.
- 16) マイケル・グラント/ジョン, ヘイゼル共著, 西田實他訳 (1988) 『ギリシア・ローマ神話事典』 東京: 大修館書店.
- 17) 吳茂一著 (1985) 『ギリシア神話』 東京: 新潮社.
- 18) Félix Guirand (ed.) (1985) *New Larousse Encyclopedia of Mythology*. New York: Crescent Books.
- 19) Thomas Bulfinch (1979) *Myths of Greece and Rome*. London: Penguin Books.
- 20) Richard Carlyon (1981) *A Guide to the Gods*. New York: William Heineman.
- 21) <http://campus.jissen.ac.jp/seibun/> (公開論文)
<http://www.angel-zaidan.org/broadband/> (研究紀要)

引用文献・注釈

- 1) 図1 「推定されるホモサピエンスの拡散経路」 国立科学博物館, NHK 主催『日本人はるかな旅』展, 2001 カタログ冊子, p.16.
- 2) 図2 「世界の古文字起源地図」 Hsu Ya-hwei, *Ancient Chinese Writing*. Taipei: Taiwan National Palace Museum. 2002, p.60.
- 3) Bachofen (1861) p.3.
- 4) 上山安敏 (2001) p.313.
- 5) グレーヴス (1973) p.3.
- 6) 図3 “Hermaphrodite” http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Reclining_Hermaphrodite.jpg